文學博士　坪内雄藏講述

文學入門

明治文庫

早稲田大學出版部藏版

文學入門目次

第一　文學の定義……一
第二　文學の本領(上)……三〇
第三　文學の本領(下)……三九
第四　文學の體式……五三
第五　文學の內質……六八

文學入門目次 終

文學入門

文學博士　坪内雄藏述

第一　文學の定義

文學といふ言葉は東洋では遙かの昔より使ひ慣れ來つて居る言葉で大體の意味は誰人も善く御存じの譯であるが、近時盛に使用する文學の意味は大分趣を異にして居ります。就中此の二十年許前から日本で使用する文學といふ言葉の意味は餘ほど狹いもので、昔の意味と決して混じてはならないのであります。夫故に文學と云ふことを或は全くお心得てないお方、又は十分に御存じてないお方もあらうかと考へまして、今日は文學と云ふことに就て概略のお話をしようと思ひます。隨つて表立つてむつかしく科學的に說くのではない、只ほんの平易にお話をして見ようと思ふのであります。

昔も「文」といふことを「武」に對して「文、武」と並べ稱する時分には、二つながら必要のものと說かれて居たのですが、動もすると「武强文弱」などと申して、文は有害なものゝやう

に卑められたのであります。況んや近頃我々共の申す意味の文學は更に狹い意味であるだけに其の濫用に流れた場合には有害無益と認めらるゝも無理のないことである。隨つて文學に關係しようとする人々は豫め其の正邪眞僞を分つ準備として文學の本質及び本領を了解しておく必要があります。

昔は我々の眼に見、耳に聽き、心に浮べ得る宇宙間の森羅萬象即ち天地間の有らゆる事物を引括めて「天地人三才」と云ふ簡略な言葉で蔽つたものであつた。それが近頃西洋の學問が入り來つて以來は稍〻此等の言葉遣ひが變つて宇宙間の森羅萬象を「自然」と「人間」と此の二つの言葉で蔽ふことになつた。「ネーチュア、アンド、マン」此の二つが森羅萬象の總名になつたのであります。「自然」といふのは日月、山川、草木、禽獸から總て「人間」以外に天然自然に成立つて居る、有りとあらゆる物を含む。眼に見えるもの、見えないもの悉皆含めて「自然」と云ひ、それに對して我々人間だけを別に一つ引離して扱「自然と人間」と斯う云ふのであります。尤も正當に言へば人間も亦自ら成り出でたものに相違ないから、「自然」の一分とも言ふべきであるが、何事もさう云つて仕舞つては區別が無くなつて仕舞ふから假に「自然」「人間」と二つにして、彼の限りなく大いなる「自然」と眇たる有限の「人間」とを對せしめるのである。

さて吾々人間は右二類の現象に對する時に當つて凡そ三樣の心的態度を取るが通例である、言ひ換へれば此れ等の物に向ふ時の人間の心の持ち方は凡そ三色ほどあると思ふ。さう云ふと諸君は三色ばかりではない、人心は面の如しで銘々一人毎に違ふ。例へば爰に林檎が一つあるとすると、其林檎に對する人々の心持は人格の異なるだけに違ふ道理ぢや、例へば或人は直ぐに食べたいと思ふ。或人は子供に持つて行つてやらうと思ふ。イヤ僕は隣の婆さんにと云ふものもあらう。否々此の林檎は一種變つて居るから標本になる。イヤ是れは如何にも美しい、當分床の間の飾りにしよう。かう銘々が思ひ〳〵に云ひだした時分には如何にも區別が付かなくなつて仕舞ふが、思ふに斯くの如きは「サイエンチック」な分けかたでない。さう限りなく別けた時分には丸で滅茶滅茶である。苟も物の區別を論ぜんとする時には大抵先づ爰を捉へれば大體の區別だけは付くと云ふ所まで煎じ詰めて見なければならぬ筈です。彼の目に見える人間の態度即ち人の擧動と云ふものも別け始めたら限りはない。例へば起る、寢る、立つ、滑る、轉ぶ、座る、胡座かく。こんな風に別けはじめては限りはないが、横になる、豎になる、屈む、動く、此の位に別ければ大概大區別が附く道理。假に「屈む」と云ふ中に座るのもあれば腰掛けるのもあるとする。又「横になる」

と云ふ中に仰向くのも俯向くのもあるとする。又「立つ」と云ふにも色々あつて反り返つて立つのも俯向き勝に立つのも立つには違ひない。「動く」といふのも同樣で、飛ぶも跳るも滑るも轉ぶも皆動くのであるとする。無論是れは譬で十分「サイエンチック」ではないが、先づ此のやうに人間の身體の態度を大別しても一應の役には立つやうなもので他の心の態度も同じ道理。即ち自然に對する時、人間自らに對する時の我々の心持は凡そ三色位に分れる。其の一つは先づ物を見ると同時に專ら之れを利用しよう、實用に供しようと思ふ心。例へば柿なり林檎なりに對するや、直ちに食べたら旨からうといふことを思ひ及び、食用に供せんとする、即ち直ぐに我が用に供せんとする心を持つ場合、是れを利用の態度とする。或は林檎を見て先づ專ら其の色の美に思ひ及ぼすこともありませう、而もア、奇麗だ、此の次彩色を施す時の參考に供しようといふ心があれば、それも矢張利用の態度である。然るにそれとは違ひ同じ林檎を見ても、パテ此の林檎は不思議な林檎だ、日本に有り觸れた林檎とは違ふ、抑々何處より來たのであるか、支那の林檎であるか、或は西洋のならば何處の國の林檎であらうか、一體是れは林檎の中の何といふ種類に屬するかなどいふことになると是れは研究をする態度である。之れを名けて弟理の態度とか若しくは考察の態度とか名けてよからうと思ふ。それから又もう一種の心持がある。例へば林檎を見て食べようとも思はない、又敢て持つて歸らうといふ氣も起らない。又其の本質や傳來を調べようとも思はないが、只ア、奇麗だと思ふ。只ア、と眺める、ア、美しい、旨さうだと眺める。旨さうだと思ふばかり敢て食ひはせぬ、食用にしたいとまでは思はぬ。一種ボンヤリと打ち詠めるばかりの心持。ナントさう云ふ感じも時々はありませう。之れには先づ鑑賞的態度と云ふ名稱を與へてよからうと思ふ。無論此の三つの態度は離れ離れに成立つのではない、必ず相伴つて居るので、只一つの林檎を見る場合でも、單にア、奇麗な林檎だと鑑賞したばかりでは濟まぬ。扨も奇麗な林檎である、此の色合では如何にも旨さうであると感じて自ら食べたく思ひ、兎も角も持つて歸らうと云ふやうな風に、鑑賞と同時に利用の態度が伴つて來たり、さなくとも抑〻是れは何れから來つた品かといふ風に考察の態度が伴つたりするので、三者共に聯關して離れないのが常です。總て人間のする事に限らず、自然界にありとあらゆる物は截然として相分つことは出來ぬが當然である。それを區別するのは唯〻話の便宜上引離すので、其の實密接に聯絡して居ることは申すまでもない。

さて利用、考察、鑑賞と、かやうに三樣の心的態度のあり得ることは右の說明で兎に角も皆さんが認めて下さつたであらうと思ふ。此の三つの態度を能く合點して下さるといふと、文學といふものゝ本旨も自ら解けて來るが、若し十分に理解して下さらぬと後のお話が述べ悪いから少々うるさいやうだが、更に一つ二つ例を擧げて見ませう。先づ天地人と云ふ所からして天のものを一つ例に取りませう。試に月に對する時の心持、是も人に依つて各〻違ふ。前申す通り三つの態度は相聯絡して居るには相違ないが、其の人の專門、其の人の職業、其の人の平生の心掛けに依つて三態度のどれか一つが主になる。例へば爰に天文學者といふほどではないまでも、天文學に、多少の趣味を持つて居る青年があつて、それが月に對したらどうであらうといふに、多分先づ考察の態度を取るに相違ない。月と云ふ者は如何なるものなるか、是れは地球に最も近く、地球からの距離が九萬何千、其の直徑が八千幾らで、地球の四分の一に當る。あれがピカ〳〵光つて居るが、あれは實際光りがあるのではなくして太陽の光の反射たるに過ぎない、なぞといふ風に考へる。無論如何なる天文學の熱心家でも、多少月を見て美しいとか涼しいとか、思はぬことはないであらうが、それはほんの瞬間で、直ぐに窮理考察の態度に這入つて行くことになるであらう。然るに之

に又月の光を何か現在の實用に供しよう、と云ふやうな考を持つた商賣人根性の男があるとするとどうであらう。多分月を見て美しいと思ふよりは先づア、便利なものだ、是れが出て居る時は提灯は要らない、斯う毎晩出て居て呉れゝば電燈にも及ばない、誠に重寶なものだ、況んや無代價だ、どうかこいつを常設にする大發明はないかなぞと思ふてあらう。然るに詩人肌の人が見れば又大きに違ふ。詩人肌の者ならばつく〳〵と眺めて居る中に西行のやうに呟ち貌になる人もあらう。又千々に物こそかなしけれ、我身一つの秋ではないがなぞと感ずる人もあらう。といふやうな次第で只一輪の月なども其の人の專門、職業に依つて、見る時の心持が違つて來る。利用の態度を取る人もあれば、主として考察、又は鑑賞の態度を取る人もある。更に地の物で例を擧げると櫻の花。詩人肌の者が吉野山の櫻の花を見たとすれば「これはこれはとばかりの花の吉野山」、一層進んでは「麗々と長閑けき春の心より匂ひ出でたる山櫻かな」といふやうな感じが主となつて浮ぶ。然るに爰へ材木屋のある、じが來れば、ヤあの櫻はよい木振だ、皮が一段と美しいから床柱には持つて來いの品物だ。ところへ漬物屋が來れば、やれ〳〵おびたゞしい櫻だ、此の花をみんな鹽漬にしたらどうだらう。そこへ植物學の心得ある書生が來たとすれば又植物學上から

觀察すると云ふ風に皆それ〳〵の專門に依つて眼の注ぎかたが違ふ。人とても亦同じ理合で、兒島高德とか菅原道眞とか歴史上の人物を敎育家が見れば直ぐに參考の態度、利用の態度、應用の態度を取る。利用の態度は應用的態度と名けてもよい。謂へらく高德と云ふ人物は我が日本の武士道の歴史に於ても一異彩を放つて居る、第一あの姿がよい、櫻樹を白うして詩を題するなどゝ云ふは全く理想的に出來て居る、斯う云ふ事實は中學小學などの生徒の敎育に有用である。兒島高德といふ忠臣が實際あつたかないかそんなことは敢て問ふには及ばぬ、只花やかな歴史上の佳話と云ふことに目をつけて鼓舞訓誡の用に供しようと言ふ。ところが近頃の科學的歴史家になると大きに又趣きが違ふ。冷然として曰はく一體兒島高德といふ男は、歴史上有無の疑はしい人物だ、其の仔細は、斯樣々々といろ〳〵綿密な考證がはじまる。畢竟考察躬理の態度からいふと歴史上の事は大がい怪しくなる。彼の櫻井驛も怪しい。重盛の諫も疑はしい。西洋のことにしてもシルレルが書いたウヰルヘルム、テルは有名なものであるが、歴史上の事實としては怪しい所ではなく全くの小說でありませう。或は日本の佐倉宗五郎の如き、芝居で俳優が演じ又は講釋師が張扇で叩きたてるやうな人物ではなかつたらしい。或は菅原道眞とても從來の人々が崇拜して居るほどの人でないかも知れぬ。但しそれは歴史家の態度、考察の態度であつて、利用應用の態度から見ればさう云ふことは少しも取らない、唯其の利ありと見た點について利用を試みようとするばかりである。さて更に轉じて詩人なり文學者なりが兒島高德、ウヰルヘルム、テル、佐倉宗五郎等を見たらば如何。是れは又別て考察家とも違ひ應用家とも違ふ。應用家は利用上の都合から成るべく其の人物を理想的の人、圓滿完全の人にしようと努める氣味があるが、詩人文學者の感じは必ずしもさうでない。惡るい所にまでそのまゝに同情する氣味がある。善惡美醜ともそのまゝに、あはれ〳〵と詠めて必しも是非の批判を下さない所に鑑賞的態度の本體が現れる。もとより詩人文學者とても久しく同じ感じにのみ止まつてゐるのではない、次々の瞬間には歴史上の事にも思ひ及ぼすであらうし、其時代との關係はどう云ふ所にあつたかと云ふ點にも思ひ及ぶであらう、又應用の態度を交へることもあらう。古來大いなる詩人文學者を見るのに多少經世經國の念を持つて居ないものはない。是れは即ち鑑賞の態度から轉じて國家の爲、人道の爲といふ應用の態度へ移つたので是れ將た自然さうなるべき筈であるが、只大區別だけを述ぶれば以上の如くあるべきだらうと思ふ。

さて此の三者即ち應用の態度と考察の態度若しくは窮理的態度と鑑賞的態度と稱すべき態度と此の三者の間に優劣があるかといふに、優劣は無いと見るはうが、當然であらうと思ふ。先後即ち何れが先、何れが後といふことはありませうが、利用が一番貴いとも云へず、考察が最も必要とも云へない、鑑賞は遊戯的だ、遊び同樣だと貶しめる譯にも行くまい。蓋し此の三拍子が揃はなければ正當の意味でいふ自然界の觀察も出來ず、人間界の觀察も出來ず、隨つて人間が正當に世に處して行く方針が立たぬといふものである。併しながら其の然る所以の理由を說明せんとすると大分複雜な大きな問題にもなつて手輕には申しかねるが、ほんの緒を解くまでに、左に只ざつと三態度に優劣のない理由だけをお話し申して見ませう。

先づ利用の態度は人間といふ動物が是非とも眞先に取らねばならぬ態度である。是れは人間には限らない、有らゆる生物は皆先づ此の利用的態度を取らざるを得ないのである。朝顏が日光を求めて垣の上へ這上つて行くにも、多分無意識ではあらうが利用の態度を取つて居ると解して當然であるやうなもので、凡そ生物である限りは何者も先づ兎も角も生活してからでなければ何等の事をもすることが出來ない。さて活きて而して働かうといふ爲めには先づ成るべく我が生活に必要なものを取入れようと云ふことを思ふは必然である。是れは小兒でもすることで、勿論當才の頃から坊は主として利用の態度を取るのぢやなぞと心得てやつて居るのではないが乳房を取りさへすれば口へ入れる、決して乳房を見てアハレ〳〵なぞと詠めてばかりは居ない。妙な格好の物だ、抑も此の乳房たるや何處より來り何處に行く……そんなことを考察しても居ない。只飲まうと云ふことばかり思つて居る。野蠻が矢張さうである。野蠻の時代にも考察、鑑賞皆ある、而も第一は利用の態度で、木の實が其處に落ちて居れば直ぐ拾つて食ふ、或は獸類が居れば打ち殺して食物にしようと努める。即ち衣食住の安樂と滿足とを得ようとするので、成るべく我れに苦を與へさうなものを捨て、我れに樂を與へさうなものを取り入れようとして居る。是れは文明國とても同じである。文明國でも先づ第一は衣食住である。所謂倉廩實ちて禮節を知り衣食足つて榮辱を思ふて、食ふ物や着るものがまだ足らぬ中はなか〳〵名譽不名譽なぞを思ふ遑もない。倉廩が空である、明日食ふことが出來るやらどうやら分らぬ時分には中々以て文學藝術は無論のこと禮節をすら思ふ遑がない。恰も名ばかりの紳士連がやゝ時刻おくれに立食會に臨んだやうなもので、食はうと云ふ一心で人を押し除けて突貫の勢で食ふ。さう云ふやうなことは自然の人

情の働きである。但し野蠻と文明との相違は文明國であると高尚な安樂を得ようとする。野蠻や下等社會であると、何でも構はない食ひさへすればよい、飲みさへすればよい、着さへすればよい、住んでさへ居ればよいと云ふので高い卑いの違はあるが利用的といふ點だけは違はない。斯くの如きを名けて實際的精神と云ひませうか。即ちプラクチカル、スピリットといふものが先づ第一に活動するのが人間の社會のならはし、進化の法則と申してよからう。さうしてそれに伴つて追々外の精神が成立つて來るのである。かく生存の爲に競爭して居る時分に尤も必要なるは利用的態度である。但し爰て云ふ利用の意は甚だ廣い、唯〻衣食住計りではない、先づ國を平穩にする、先づ國を豐かにするなどと云ふことを思ふのも利用的態度で、苟も實利に關する限りは皆利用的態度の作用である。さて是れは決して卑むべきでない。これが疎かになれば社會は亡びてしまふ。功利主義などといふと一知半解の徒は往々にして卑しいことのやうに思ふが大きな穿違であります。併しながら凡て本當に國家の益、人間の益になるやうにと努めんとすれば、先づ其の用ふる事物の性質を善く知り、又其の用ふる事物の効用をも善く合點して、其の由て來る所をも、他の事物との關係等をも知らなければならぬ。それ等の事まで悉く考へぬいた上でなければ、國家人類の利益になるやうにとてした事が却つて害になつたり、我が身の爲めにとてした事が却つて不利になつたりすることがあります。早い話が自分の身體を肥やさうと思つて或食物を食ふ、滋養物の積りて食つたのが存外病の原となるたぐひ。かやうなことは何事にもある。さうして見ると只利用といふことばかりを思つて居る譯にも行かぬ。利用せんと思ふと同時に必ず考察しなければならぬ。理を窮めなければならぬ。いやそれが爲めにばかり考察の必要が起ると思つては間違ひ易い。利用上の關係は無いとしても、人間にはどうしても考察の態度を取らなければならぬ理由が外にもある。それは例へば人間は衣食住は十分で食ふには困らぬとしても、猶人間といふ動物は厄介な者で肉體の外に心といふお荷物を持つて居る。體は樂をして居ても心に苦を持て居ることがある。雨露は凌がれ衣食には不足がなくなつても何か心に不安を感ずることがあらう。これは今日の文明人のみの性質ではない。野蠻時代にも屢あること、又あつたらうと思ふ。人間と云ふ動物に慧く心、恠む心、訝る心があり又珍らしい物に眼を注ぎ耳を欹てる心がある以上は、これ等の心を滿足せしむることも亦甚だ必要になつて來る。衣食さへ足ればよい、身體の安樂さへ備はればそれでよいと思ふものでない、心の平穩を得よう心の滿足

を得ようと思ふと、どうしても見るものの聞くものにつけて、其の本質を考へ其の由つて來る所其の及ぼす影響までも考へ窮めなければ、安心が出來ないと云ふことになる。子供の擧動にも此れが見える。二才三才の頃には手も善くは動かぬ、口も善くは利けぬ。で其頃は只母に抱かれ守に負ばれ乳母に抱かれチョチ〳〵アハ〳〵で日を暮して行く次第であるが、やゝ物が云へ眼が見えて來るとあれは何、是れは何と五月蠅く尋ねはじめる。即ち好奇の心が萠しはじめるので事々物々につきて其の性質其の由來を知らなければ滿足しないと云ふ傾向を現して來る。此の本能的の作用は無論淺々しいところで止まつてしまうことが多い、隨つて簡單な説明で滿足するが常である。恰も農家の爺さんや婆さんがはじめて東京へ出て電車などを見た時の質問と同じで「ハア魂消た。走つて居るものはあれハア何てがす」。「あれは電車」。「どうしてふとりでに動くのでがす」。「電氣で動く」。「ハアさうかね」。「分つたかい」。「ヒヤアちつとも分りましない」。こんな風で滿足して居る。子供や野蠻人の好奇心はほんのそんなもので、野蠻未開の初めは極く漠然とした説明をすれば滿足して居たものゝ、それが人智が開けるに隨つて追々厄介になる。そも〳〵人間はどうして出來た。神が造つた。其の神は何處から來た。形はあるか、ないか。人の形をして居るか。七情を具へて居るか。平生どこに居る。其の他皮肉なむづかしい疑問が續出するから甚だ以て厄介なことになる。併しながら是れ畢竟人間發達の自然の結果である。之れを要するに此等心の種々の不安を除き去らん爲めに考察を試むることは、子供にも田舍人にも野蠻未開の人間にも共通の性で之れを名けて研究的の精神と申してもよからう。此の心からして所謂科學が發達し哲學も發達するのであるから、サイエンチフイック、スピリットといつてもよい。前のプラクチカルに對してスペキユレチーヴといつてもよい。さてもう一つ子供にもあり野蠻にもあり田舍の人にもある、イヤもう一層進んで言へば下等動物にもあると云はるべきものは前申した鑑賞といふ心の作用である。物を見て利用の念もなく、考察の心もなくたゞそれを見てあはれ〳〵と感じ「ハレヤレ」と感ずる心、これより餘計説明すると具合がわるい。はて是れは困つたものだ。あはれ〳〵と感ずるのを物の美に感ずるのだと云つてもよいやうなものだが、美と云ふ言葉すらが曖昧な言葉だけに矢張り穩かでないと思ふ。唯〻其の物の「趣」に感じ「味」に感ずる、唯それだけをいふのて。例へば子供が初めて乳に觸れた時分に定めし何とか感ずるに違ひないが決して旨いなぞ洒落れた言葉は出ない。ウマ〳〵ウマ〳〵といふがあれは意味あつていふのては

ない。蓋し旨いといふ言葉は判定を言ひあらはした言葉で、智恵の働いた結果だから、當才の先生ではそこまではいかぬが、唯〻何となく妙に心持がよかつたのみだが、何とか感銘したればこそ二度目に又口を持つて行く譯でありませう。それから赤い切を見せる、風車を見せる、先生目を着ける。併しこれは赤いとか美しいとか初手から判定するやうなことはない。唯〻それが目を刺戟するので反射作用を起して、アハレ〳〵程度、ハレヤレ程度の感銘を起す。大人が月花を見る最初の瞬間の感じも稍〻之れに似たもので、只アッと感ずるばかり、いまだ美しいとか、寂しいとか名をつけて評する遑はない。で彼の「これ、は〳〵とばかり」の句が一段と面白く思れる。勿論それは鑑賞的態度のほんの初歩を指したのである。やゝ進んでは幾分か智恵の作用が加はり外の事柄をも聯想し、そこで以て一段高尚な、一段複雑な感銘を得るやうになる、それを美感と云ふ。此の美感は半分は外界よりの刺戟で、初めは野蠻も子供も外物に對する反射作用、さて又半分は考察的態度の結果と稱してもよい。文明人も月を見ても花を見ても只アハレ〳〵と感ずるばかりは同じであると思ふ。唯歌人か詩人の方では、只月や花の外面ばかりを見てゐないで其の内容を見る、月と云ふものは眞丸なもの即ち圓滿なものゝ標章と見ても宜しい。月は美しい、純一にして雜り物がない。清淨にして汚れたところがない、あゝ尊い、潔いと多少道德の方へ引あてゝそこに別種の味ひを加へて來る。一寸これだけいつた中にも明かに幾分の考察が這入つて居れば、道德的といふことに利用、應用の態度も見えて居る。只月の光や色を其の儘に詠めた態度ではない。或は又あゝ此の月は我々も見るが千里を隔てた西洋の人も見るであらう、戰地の人も見るであらう、などと種々の想像を加へて來るから月が一段と奥ゆかしく意味深くもなつて來る。ところが田舍の人や子供ではかやうな想像が加はらぬことが通例であるから、例の純粹のアハレ程度でお仕舞。更に一層進んで云ふと犬や猫でもアハレ程度には感ずるであらうと思ふ。犬などは月に對しては多少の鑑賞力を持つて居る證據には、月夜には遠吠をする。尤も遠吠には色々異說もあるが、兎に角月の光に動かされる證據にはなる。月を見てあはれと感ずるのだと云つてよい。只人間のやうにそこへ色々な聯想を以て來ることは出來ないから、歌も發句も作らない。詩や歌は鑑賞的態度の結果だが、それは考察の態度や應用の態度が加つてはじめて出來るので、就中東洋人に至つては應用的態度が殊に烈しい。蓮は其の儘に見たばかりでも美しいが「泥中の君子」と意味を附けて見ねば氣がすまぬといふのが東洋氣質である。或は梅もさうで「魁けて咲

く」とか「花の兄」とか色々の理窟を付けて愛する。尤もそれを必ずしも悪るいとは言はぬ。人間の頭の働きは複雜であるから色々の思想が加つて鑑賞の内容を高めたり深めたりするのに何等不思議も不都合もないが、本來を云ふと只アハレ〳〵で此の心の作用は如何なる無智無學のものにもある。下等動物にまで行渡つてゐる。即ち是れは人間性の本然であると斷定して差支ないと思ふ。先刻の坪井博士のお話の中にも野蠻が色々飾をする。額に三本筋を入れたり、耳に穴をあけて物をつるしたりするとあつたが、皆同じ理で。それから又鳥にも此の本能のやゝ目立つのがある。南洋邊の鳥や南亞米利加近傍の鳥には踊をやる鳥が居る。一羽の鳥が踊ると其の周圍へ外の鳥が集つて來て聲而白く音樂を奏する。中には舞踏場のやうなものを飾りたてゝ建築し妻君の機嫌を取る鳥などもあるといふことです。さてかく美を喜ぶ心これを名けて假にエスセチック、スピリットと云つてよからうと思ひます。觀美的精神とでも云ひませうか。

以上實際的精神と考究的精神と觀美的精神と、此の三つは相纏綿して人間の理想を組立てる大切な精神です。若し人間が單に衣食住とが現在目前の利用ばかりを思つて居たならば、遂には甚しく俗化して仕舞ひ、進歩向上の望は絶えるであらう。若

しくは人間が理窟ばかりを研究する方に傾いて仕舞つたら、世は擧げてラボラトリーになつて、人は皆冷灰枯木の如くになるでもありませう。又人間が只何の意味もなく物に見とれて「あはれ〳〵」と云つてばかり居るやうであつたら如何であらう。哀んでは傷り、樂んでは淫し、或は放逸無慚、或は浮靡柔弱、始末におへぬことになるであらうが、幸ひに此の三つの心が多少程よく調和されて活動する習ひであるから、そこで初めて人間が何等かの理想を作り出すやうになるのである。道とか敎とか云ふやうなものは詰り此の三つの精神が活動した結果で出來るのである。要するに「美」といひ「理想」といふ觀念からが畢竟は此の三つの精神が相合して活動した結果として成立つのである。先づ美なるものを見ると同時に「あゝ美しい」と感じ、それと同時に利用の念が萌し、どうか斯くの如き美しきものを常住に存在せしめたいと思つたり、若しくは醜いと感ずるよりして之れを除きたいと思ひ立つたり、或は又如何なるが最も高尚な美で、如何なるがなぞと考究する。斯樣な心があるので人間が段々上に向て進んで止まないことになる。若し此の美を見る力が低かつたならば不具なもの醜穢なものをも厭ひ嫌ふことなく、隨つて万事万物不完全のまゝで可しとして詰らぬ程度に甘じて仕舞ふであらう。例へば美を見る力の低い者より見たなら

ば今日の日本などは上なくすばらしい國とも見えませう。古より日本は大ぶ立派な國ではあるが今日ほど日本の地位が高まつた時代はなかつたのである五大洲中大國と誇つて居る諸强國と兎に角肩を双べるに至つた。國體は勿論制度文物、風俗、習慣、いづれも善美であると斯う滿足して仕舞つたら如何であらう。進歩は全く止つて仕舞ふてあらう。ところが實際我々の美を見る力即ち鑑賞力の上よりいへば、まだ〳〵日本は缺陷だらけ醜穢だらけであると見える。私共にすらさう見えるから聰明者の目を以てすれば尙更火を見るが如くに醜いところが見えるであらうと思ふ。武に於ても文に於ても人情に於ても風俗に於ても慥かに疵だらけである。思ふに諸君の看美的精神が高ければ決して今のまゝで滿足する筈でない。そこで以て果して何としたら此の醜悪を除いて善美を發輝することが出來るかといふ考察的態度を諸君が取つて呉れなければならぬ。即ち日本の眞に美とすべきは何であるか、現に醜とする所は何であるかを考へ、それと同時に如何にして其の美を發輝し、如何にして其の醜を除くべきかと善い方を殖やすことを考察して貰ひたい。それも唯〻机の上で考へて見たり座つてばかり居ては何にもならない。既に斯うと見込がついた以上は、先づ先へ自分が進んで政治の方面でも、實業の方面でも、文學藝術の方面でも、各〻是れこそは今までの缺陷を補ふに足ると考へた其の方面に向つて實際的に進む。かう行けば日本國は万々歳だが、其の源はと言へば一に鑑賞的精神の活動に外ならずともいへる。要するに此の精神の活動が盛でなければ理想といふものはツマリ成立たない。現狀に滿足してしまふことになる。尤も屢〻云ふ通り鑑賞的態度には到底考察的態度が伴はなければならぬことは明かであるが、他の態度にもまた此の鑑賞的態度が伴はねばならぬ。然るにさうで無く只或一方ばかりに偏しがちになつて居る人物が間〻世間にはある。頭から利用頭から考察といふことばかりを考へて、物の「趣き」を賞し物の「味ひ」を味ふことをせぬ人達もあるが、此れは大きな間違でありませう。そも〳〵「趣き」とか「味ひ」とかいふものは是れは到底哲學や科學の力で呑込めるたぐひのものでない。くはしいことは段々に申しませうが、先づチョット一言丈いつて見れば、澁みとか、甘みとか、をかしみとか、暑さとか、寒しさとか、凄しさとか、勇ましさとか、苟も「さ」とか「み」とかいふ語尾のつく事ども、或は「イナセ」「粋」「かうとう」或は親心、少女心、人情など、或は暴風雨の趣き、戰爭の模樣、火事、津浪などのすさまじき體など、これらは到底サイエンスなどの力で呑み込めるものでない。フイロソフイーでも分らぬ。全く身親しく經驗して其の物にぶつ附かつて、鑑賞的

態度を取つた時にのみ呑み込めることである。万一にも實物に對して鑑賞的態度を取ることが出來ない境遇の人があるとすると其の人には此の方面だけの事は缺如して仕舞ふわけ。そこで文學藝術といふものが甚だ大切なものと相成つてくるのである。さてお話が爰まで進むとやつと本題へ這入ることが出來ます。これから文學の定義のお話に取掛りませう。

豫め一言申して置くが文學藝術と一つらに申すうちにも、美術は確かに此の鑑賞的態度を本領として成立つて居るものである。藝術の事は今日は說きませぬが、要するに文學と其の本領に於て異る所はない、唯手段が違ふのみである。文學は文字を以て要具とする。藝術即ち美術は或は音聲或は色彩を要具とする。即ち手段は違ふが目的は同じである。

さて文學といふ言葉には廣狹の二義がある。文學といふことは昔は甚だ廣い意味に用ひられて居つたので、これは西洋もさうで、而して東洋では文學と云ふは昔は主として道德に關したものになつて居つた。然るに今日用ひるのは太だ狹い意味である。尤も今日でも專門家でない人が廣義に使用する場合には敎育に關する或種の著述や、歷史や、哲學などをも文學の中に入れることがあります。現に此の早稻田の學校でも文學科といふ科の中に哲學も這入つて居れば歷史なども入つて居る。併しながら嚴密に云ふ時はかゝる科目は正當に謂ふ文學ではない。蓋し定義を立つる場合には成るべく狹く限るが當然です。廣い意味で言つたならば凡て文字を以て綴つたものは皆悉く文學となつて仕舞ふ譯です。公用文や電信文や規則なぞを集めたものも文學になつて仕舞ふ。されば何か判然たる限界を立てゝかゝらねば却つて混雜を生ずるの弊がある。そこで私が文學といふのは太だ狹い意味のものを指すので、主として純文學、美文學、輕文學などといふ意味である。即ち鑑賞的態度に密接の關係を持つて居る文學を指すので、主として詩とか歌とか小說とか戲曲とかいふやうなものをいふのである。其の定義をこれでは少々お粗末過ぎるやうではあるが分り易いを第一に碎いていへば、

鑑賞的態度を持して、自然及び人間を觀察し、斯くして得たる結果即ち感想を聞く者若しくは讀むものをして、作者と同じやうなる感想を起さしむるやうに精選せる字句に綴りて寫し出だせるものの之れを純文學といふ。

これでは餘り俗談的でサイエンチフィックでないといふ非難を受けるかも知れないが、大體の趣旨は先づさうである。それから特に附け加ふべきことは、

應用窮理の精神を伴ふを惡しとせず、又全く斥くる能はざる次第のものながら尙ほ鑑賞的態度を其の本領となす。

此の附加への意は更にくはしく說きませう。前に申し述べ來つた如く自然に對する時にも人間に對する時にも我々の心の持方が三樣ある。此のうち鑑賞的態度、即ちあはれ〳〵と打眺める底の心を持して自然を觀、人間を觀た場合に必ずや後に何等かの感銘が殘る。或は淺薄な、或は輕浮な、或は深刻な、或は强烈な感銘が殘る。さて深く銳く殘つた場合には人間が心の自然の働きとして之れを他人に傳へたく思ふ。自分があゝ面白かつた、あゝ美しかつた、あゝ情けなかつたと感じた時に其の儘で居られぬのが人間の特性である。これは社交性といつて、我れ以外の他人と思想感情を交換し交際して行かざるを得ざる本能の然らしむる所である。自分一個に藏めてしまつてゐることが出來ぬ、兎角他人に向つて同感を求めたがると云ふが人の天性である。されば物を見たり聞いたりして何か切なる感じが起つた時などには如何してもそれを他人に語らず傳へずには居られない。且つ成らうことなら其の感じたことを見聞したことを聞く人讀む人に自分が感じた有のまゝに巧く銳く傳へたい。感じた通りを同胞に傳へて同じ感じを持たせたいと思ふ心が知らず〳〵の間に働くと、斯う解釋するが當然であらうと思ふ。或は世をすねた詩人などの中には、我々は決して世間の俗物共に讀んで貰ふ爲めに歌を作るのではない、詩を作るのではない、といふ手合もあるが、それは激語といふもの。それらの人々といへども世をすねて浮世の誰れかに讀んで貰ひたいといふ氣はある。矢張傳へたい。名山に藏して知己を後世に待つといふのはそれだ。唯一人山へ這入つて仕舞ふといふのは決して人情自然の働でない。そこで傳へたいと思ふ心持を事實だとすれば、次に傳へるならば自分の感じた通り傳へたいといふ氣があるのも自然の道理。併しながら此の望みを遂げんとすれば尋常一樣の言葉や文章ではむづかしい。言葉を擇び文字を選ぶ必要が生ずる。唯思つた儘感じた通りに書けばよいかといふにさうでない。思つた通りを口を開いて出るまゝに話してそれを速記して貰つてそれで人に傳へられるものでない。餘り自分が感激して書いた物は往々にして囈語のやうになつて要領を得ない。他人が讀んでは根つから面白くも悲しくもないことが多い。支那の文人などが一字一句を精選し千錬萬鍛した事例はいろ〳〵ありますが、これは西洋とても同じで、例へば彼の佛蘭西のフローベルなども申した「本當に思想を現す語は唯一語あるのみ」と言つたが確言です。成程何か一つの物を見た時

に嚴密にいへばそれを形容する句は一つしかないことが多いでせう。「美」「艶」「麗」、皆同じやうな語だが全く同じではない。「艶」が當る場合には「麗」が當らぬといふ鹽梅に嚴しく云へば區別がある。「遺憾」「心外」「くちをしい」「悔しい」、意味の上では皆同じことだが、調の上に大ぶの相違がある。女の言葉に「遺憾千萬」と書いては薙刀の一手も使ひさうになるから「くちをしい」とか「悔やしい」といはせなくてはなるまい。或は又ハイカラの當世紳士に「心外でござる」なども面白くない。其の人らしくない。こゝは何とか佛蘭西語か何かで云つて貰ひたいやうなもので、煎じ詰めれば本當に我が感想を言ひ現す言葉は唯一語ありといふフローベルの語が尤になる。さて其の動かぬ所の言葉を以て、感想を言現はして綴つたのがそれが所謂純文學である。固より一氣呵成的に綴られたもので立派な文學として今日まで傳へられたものもあるがそれらは作者が天才の然らしむる所、自ら當意即妙に出來たのである。併し我々共が今日講釋などをする時分に語る言葉を其の儘に記錄してそれが文學だなぞと思つたら大間違である。あくまでも言葉は選まなければならない。グレーの「墓畔吟」などは小品ではあるが十何年間の研鑽刻鏤を經たといふ。如何樣さうもあらうか。一字一句よい加減なことはしてない。所謂增減すべからずといふ名文句、日本人の手では一句も一字も動かされないは勿論、西洋の名家が筆を加へようとしても筆の下しやうがないといふことです。或はミルトンの傑作或はテニソンの名篇等苟も今日までもてはやされてゐるやうなのは和漢洋ともに一句々々生へぬいて居るやうに出來てゐる。フローベルの所謂唯一語あるのみの其の一語が使つてある。此に於て乎美文ともいはれるのです。併しながら精選した言葉といふのは、あちらの字引、こちらの辭典と、機械的に穿鑿して拾ひ出し、又は必ずしも一つ〳〵に鎚て磨くやうにして拵へるといふ意味ではない。眞情から流露した言葉ならばそつくりそのまゝでよいこともある。此の呼吸は一概に律する譯には行かぬが、ツマリどう換へて見てもよいやうなのでは美文でないといふことだけが眼目です。

それから又純文學の態度は飽くまでも鑑賞の態度であるといふことについて今一度說明すれば無論人間のことだから徹頭徹尾鑑賞的態度のみを持しては居られぬ。これは〳〵とばかり花の吉野山といふうちには場所に關する考、吉野山といふ名山に關する意識や回想やが其の中に籠つて居ることは明かである。或は月やは物を思はすると疑をかけて見ればそこに既に一種の考察的態度が加つて居り、我が身一つの秋にはあらねどといふ場合も同じ道理即ち應用的態度や窮理的態度が毎に幾

らかづゝ加つて居るは無論ですが、尙ほ詩歌の本體は鑑賞的態度になるものたるや確實である。先づ鑑賞的態度を取つてそれから段々に應用窮理の態度をも加へ、さうして出來たのが文學、頭から現在の敎育の助けにしよう、窮理の方便にしようとて小說や詩を作らうとしたら本當のものは迚も出來ない。ミルトンの「失樂園」には或意味から云へば應用的態度が加つて居り、馬琴が「八犬傳」にも同樣の態度が見えて居る。併しいづれも本體となつてゐるのではない。凡そ人間として世間に處するに人間の爲と思はなければならぬ。よく世間には美術の爲の美術文學の爲の文學などゝいふ人があるが、若し此の意味が「人間と相關する所なし」「社會の利害に關せず」といふ意味ならば太だ以て不條理で私にいはせれば殆ど無意味である。成程今日の小學又は中學敎育の爲にとか、明治三十七年政治界の爲にとか、或は單に日本國の爲とか限つたら不都合にもあらうが、ヒウマニテーの爲にといふ意味ならば、人間の爲す限りの事で此の公式に外れることがあらう筈がない。人間の爲を聊かも思はぬ位なら文學も藝術もあつたものでない。本能滿足の爲といふかも知れぬが、その本能滿足といふことが只我儘といふだけの意ならば到底自墮落の原因たるに外ならずて、何事につけても命がけにはなれまいと思ふ。ところが命がけになれぬやうでは

大文學や大藝術の成立たう筈はない。眞摯な研鑽は純然たる自己中心主義だけでは迚も行れないといふ所に心附けば文學の究竟目的はヤハリ應用にあることは明かである。文學は鑑賞の態度に成るとはいふものゝ、決して遊戯に終るものではない。然らば一體何の爲めに我々は文學を研究するものであるか。今日の如く國家一大事の秋に際して文學といふものは何も役に立たぬものゝやうに思はれる、何故に初から應用的態度や考察的態度を取らぬかといふ疑が起る。そこで文學研究の必要なる所以を一通り辯ぜなければならないことになる。これから少々込入つたお話になるがしばらく辛抱して聞いて下されたい。

第二　文學の本領（上）

私共の考に據ると自然及び人間の眞相は文學藝術の力を藉りなければ會得し難いものだと思ふ。唯我々が實際に當つて經驗したばかりで分らず、科學哲學の助を藉りて研究した所で尙ほ十分には分らない。文學と藝術とで尠くとも三分の一を補はなければならぬものだと信ずる。然るに世間の或人達は曾て文學藝術がさう云ふことに役に立つとは思はない。文學藝術と云ふものは全く娯樂である、遊び事である、人の心を慰める外に必要はないと言ふ。事物の道理は科學が敎へて呉れる、又現在見ること聞くことの出來ない幽玄神秘な事は哲學が敎へる。尙ほ足らざる所及ばざる所は宗敎が暗示して安心を與へる。其の他は自分がぶつかつて閲歷して經驗上で合點する。文學藝術の如きは何にもならぬ。唯氣が屈した時分に音樂でも聞けば心が慰み、或は繪を見、小說を讀めば悶々を忘れる。だからそれ丈けの用しかありはしない。されば小說は寐轉んで讀むもの、新體詩などは眠氣を催うする時に讀むものだなどと解釋して居る人も多いが、文學美術の本來は決してそのやうなものではない。尤も今の世間には詩を作るもの、美術に從事するもの自らが兎もすれば自ら己れを卑うして、右に類する考でやつて居るものが無いともいはれぬ。ほんの一時の娯樂を供するが役目のやうに思つて居るものも或は無いともいはれぬが、それは大間違の話です。序ながら一寸お斷り申して置くが、私自分らも時としては文學、藝術を一種の娯樂といふ意味に取つて論を立てるともある。併しそれは應用的態度を持した時の話で、應用的態度からいへば娯樂として論じて差支ないと思ふが、文學、藝術の本領から云へば決して娯樂ではない。言はゞ個々人の經驗のみを以てしては到底會得しがたい事、又科學、哲學の力を以てしては會得せしめ難い事、それを會得せしめるのが文學、藝術の本領であるといつてよい。蓋し人間の眞智といふものは二つの門を經ざれば達し難い。眞の智識と云ふものはズット奥御殿にある。其の奥御殿に到達せんとするには表門ばかりから「頼まう」と訪づれるばかりではいけない。裏門からも案内を申込まねばならぬ。彼の旅順を陷すには海の方から攻めるのも一つの軍略であるが、背面の陸からも襲はねばならぬと同樣の道理で自然とは如何なるもの、人間とは如何なるもの此の宇宙は一體どういふものであるか、即ち宇宙觀のあらまし、人間觀の大體をでも呑み込まうといふ段になると是非とも表門、裏門の二門から訪れねば更に分らぬ。表門を假に名けて智、解門といひ裏門

を感得門と謂ふ。表門は智慧で解釋することを司る。所謂考察的態度である。又應用的態度をも兼ねる。感得門といふのは前申した鑑賞的態度を持して這入つて行くべき門である。凡そ一個人が自分一人だけ自然の眞相を知り、人間の眞相を知らんとするにも、是非共此の二つの門を經なければならぬが、他人に之れを知らせやうと思ふ時には尙更のことである。されればこそ昔から聖賢と云はれる人で此の二つを併せ用ひない人はない。例へば孔子、釋迦、基督など何れも譬喩寓言類を澤山用ひて居られる。譬喩寓言は皆文學である。これは決して科學、哲學の所有物ではない。要するに自分が知る丈けならば文學、藝術に依らずとも知り得る場合が少くないが、人に傳へようとするにはどうしても此の何れかを借りねばならぬ。其の譯を少しく述べて見ませう。

玆に曾て大海原を見たことのない者があるとしたらどうです。日本は小さい島國ながら尙ほ甲州の山奥や飛騨の山奥に這入つて行くと、小學校時代の少年には海といふ感念の絶えて浮ばないものがある。小學校の先生屢〻説明するといふことを聞いて居ます。小學讀本などに海のことが書いてある、それを教師が説明しようとする時分には成程困るとがありませう。之れを川に譬へんか、道ふ。池に譬へんか、道ふ。

幸ひに湖水でもあれば幾らか説明が付くが、沼すらない地方では説明に困むてあらう。先づ池の樣なものでモット大きいものだと云つた所で海とは違ふ。人間の觀る限りでは海に限界がない、然るに池には限界があるから子供に海を分らせる料にはならない。斯う云ふ場合には據ろないから繪を見せる。兎も角も渺茫たる大海原が一眸千里、八重の潮路が果てしなく雲に連なつて居る所程は繪なら見せることが出來る。一部分だけだが地平線の樣子位が分るでもあらう。と言つたやうな譯で、海だけの事が何等か美術の力を借りなくては説明が出來ない。或は又曾て富士山を繪でも見たことのない人があるとして、それに富士山の形から趣までを合點させようとしたら如何であらう。文學藝術の助を藉らずして西洋の或僻地の半開人間か、若しくは南洋あたりの野蠻に向て、曾て類似の山即ち圓錐形式の山を見たことのない者に、日本の富士山といふ美なる山の形や趣を會得させることが純然たるサイエンスなどの力で出來ませうか。諸君の中には出來ると云ふ人もありませうが、純然たるサイエンスとなれば差詰幾何學などの方式に依つて説明せねばなるまい。先づ富士とは如何な形の山なるかといふ問に對して、扨て何といふてあらうか。かう、もあらうか。其の形不規則なる圓規形を畫き其の中心點より眞直に上に向つて

直線を立て、さて其の線の頂點に向つて圓の周邊の各ポイントより成るべく不規則的に多少のタルミをつけて線を引き、其の頂點に達せんとする凡そ二三度以下の所に於て、頗る不規則なる形を作りて横斷したるもの是れなり。やれやれ本職に説明させればまさか斯う拙くもあるまいが、用語の抽象的な點だけは先づ斯うです。手數のかゝつたものさ。ところが文學の方なら是位は何んでもない。曰く白扇倒まに懸る東海の天。或は擂鉢を伏せて薯蕷汁をぶつかける。これで分る。是れが文學の本領、藝術の本領、一舉して旅順を陷れる。其の代り漠然としてゐる。では白扇の要は何處にある、親骨は何れだと探したとても分ることでない。實地探檢のため八合目まで登つて黄金水の邊までも探したところで駄目です。もう一ついつも引く例だが、林檎をたべたことのない者に、林檎が如何な形で如何な味ひかと敎へることは、サイエンスの抽象的では出來ぬが、繪に書けば一目瞭然。尤も繪だけでは形や色合などは分るが味ひは分らぬ。味は經驗即ち實際食べて見るが一番早い。が食ふ機會がない場合はどうするかといふに、さう云ふ場合には文學者を頼むより外に仕方はない。文學者は曰く、泡雪の梨と甜瓜とを打つて一丸と爲した味だ。何んとあらましが分りませう。無論善くは分らぬ。朦朧として居る。そこが文學藝術の弱點といへば弱點で、どんな無學の者にも子供にも分る代りに、又一方には誤解の百出する虞れがあるが、單刀直入、一舉して本領を掴む力だけは他の科學などの及ばぬ所がある。是れが彼の分析したり、解剖したり、分類したり、長々しく、管々しく、説明又説明に手間を掛けて、どうかすると初めに説明した事が終ひに行くまでに人に忘れられて仕舞ふやうな傾きのある科學や哲學の及ばぬ所でもあらう。文章などに書いて御覽なさい、林檎一つの説明に十ページを費した時分には、覺えの悪い讀者は十ページの終ひごろには前を忘れて仕舞ふ。是れは序でながら近頃の小説家なども少々用心したらよからうと思ふことである。西洋の小説を學んで只細かく〳〵と形容ばかりを澤山に並べ、美人が出て來ても紳士が出て來ても、其の樣に其の擧動を寫すに三ページ位だら〳〵と五號活字で並べてあるから、只一度讀んだばかりでは印象が漠として更に分らぬ。これらは文學の本領を忘れて科學式にかぶれて墮落しかけたものと言つてよい。

さて今申した富士の山とか、林檎とか、大海原などであるならば必ずしも一生知らずとも濟むこともあらうが、世の中には知らで適はぬ事で頗る説明に困むことがある。例へば地震、海嘯、火事、戰爭などの性質、利害等をサイエンスやフイロソフイーの力で

何等經驗のないものに合點さすることが出來るであらうか。假にも戰場に臨んだ人は戰爭の悲慘なことも、其の如何ばかりまでは必要で已むを得ざるものであるかといふことも分らうが、戰場からは千里を隔てゝ內國にばかり止つて單に新聞紙位で報道を讀んでゐる者は、兎角川向ふの喧嘩のやうに思つて感情の上では徒の上の空で見て居ることもありませう。又フイロソフイーやサイエンスが如何に戰爭の性質を解釋しようとも、利害得失を說明しようとも、恐らく當人をして其處に臨ませたやうには解せしめがたいであらう。百聞一見に如かずの諺通りである。さりとて國民が悉皆其の場に臨む譯には行かぬ。さう云ふ場合にどうしたら彼の林檎の味を知るが如くに合點せしむることが出來るであらうか。或程度までは繪で出來るが、繪では皮相の一部しか見えない。戰爭の恐しさや、其の凄じさや、利害得失は文學の力、例へばトルストイのやうな作家の筆になつたのを俟つたらば多少知らしめることが出來るであらう。或は又聊かも世故人情に通じない若い手合に、人情の何たる、世故の何たるを知らせるなどいふことはサイエンスやフイロソフイーの力で出來ようか。「可愛子に旅をさせよ」で經驗させるが一番の上策、世故、人情の眞味は愚人でない限りは經驗すれば多少分る。子をもつて知る親の恩とは此の理をいつたものである。併しながら今年まだ二十歲前後で、親がゝりで學校に居る手合は、世故、人情を經驗しようと云つても實は機會がない。それが爲めに親と衝突し、友人と衝突して色々の不都合、色々の不幸を釀しつゝある。かゝる輩をして世故、人情を知らしめたならば或は豁然として悟る所があるかも知れぬ。子を持つて知る親の恩、孝行のしたい時分に親はなしといふ感じは古今に夥しい。何か方法はあるまいか。若しまだ妻を迎へないで、子を持たないで親の情、親の恩を朧氣にでも知る方はないかといふに、若し假に有るとしたならばそれは第一に文學の力であらうと思ふ。或は又他の例でいふと、西洋へ行けば西洋の人情、風俗が分るが、內國に居ては只人から傳聞するのみである。傳聞では誠に靴を隔てゝ痒きを搔くの思ひで本當の事は分らない。さういふ時分に、居ながらにして朧氣になりとも、洋行歸りの人に切々に聞くよりも深く、廣く且つ溫かに西洋の人情風俗を知る方があるかといふに、それは自分が出かけて行くに限ることは無論だが、それが出來ない場合には之を補ふ法は只一に文學あるのみである。私など無論西洋へ行つたこともなく、行く機會もなく、無論實際のことは何もくはしいことは知らないが、尙ほ或部分までは彼方の人情、風俗が分る。何のお蔭で分るか。主として小說のお蔭です。私は單に小說を遊び事として

は讀んで居ない、多少、西洋の思想の傾向、風俗の樣子を窺ふ料に讀むのであるが、其の氣で讀めば、或程度までは西洋の、人情、風俗が見えて來る。とても西洋のライロンフイーやサイエンスの書を讀んでも味はゝれぬ事が味はゝれる。それやこれやを考へ合せて見れば文學や藝術の本領が自ら瞭然となる。哲學、科學は分析、解剖を主として居るのに、文學、藝術は總合を主として何事も一握主義で專ら直覺に訴へる。さういふ本領を持つて居る。そこで少々むづかしく言ひかへて見ると

自然及び人間に關する無形の理合を解剖的、分析的に探知し推察し判斷し闡明するは科學、哲學の本領。

自然及び人間に存する無形の趣き若しくは味ひを特殊の一時の現象中に寓せしめて綜合的、個體的に寫し出すは文學、藝術の本領。

以上は極く大體を申したので、もとより盡きては居ない。此の次には文學の本領について今少し申し足して、それから文學に色々の種類のあること、つゞいては文學の體式といふことに說き及ぼさうと思ひます。

第三　文學の本領（下）

前回には我々共が自然に對する折、又人間界を打眺める折に自から三樣の態度があると申した。件の三態度は離れ離れではなく始終連綿として居るものであるが、兎に角大體に於て利用、考察、鑑賞と三樣に分れて居るといふことを申した。且又件の三態度を三つながら用ひなければ何事も何物も迚も本當には分らぬ、人間界の事だけも十分には分らぬ、況んや大いなる宇宙間の眞相などは分るものではないといふことをも申した。蓋し此の三態度は大概實際に於ては人皆が備へて居るもので、どんな實用一點張りの實際家であつても、必ずしも利用の方面ばかり見て居るのでなく、どんな風流一點張りの詩人でも多少は利害に心を注ぐといふ次第のものゆゑ、事物の眞相を會得する最も手取早い方法はといへば、直ちに身みづから事物其物に觸れるに如くことはないは無論である。即ち經驗に如くものはない。さればこそ「百聞一見に若かず」と昔の人も言つた。例へば田舍人などが能辯家の口から東京の繁昌な噂話を幾ら詳しく聞いても、まだ何となく朦朧として呑込みがたいことが多いであらうが、一度自身で東京へ來て淺草を見、上野を見、銀座から下町、山の手と一通り

肉眼で見あるいたならば、たつた一日で以て話しで聞いたよりはずつと明瞭に分るに相違ない。一事が萬事で、何事も經驗に若くことはない。所が困つたことには人間僅か五十年、其のうち幼稚時代や病弱時代があるとすると、迚も大した經驗は出來ぬ。よしや五十年が三十年でも、幸ひにして丈夫で豐かに暮してさへ居れば、隨分色々のものを見聞するとも出來ようし、諸々方々へ旅行して觀察することも出來ようが、縱しや丈夫な身體であつても、若し生活に困るやうであれば、迚も遠くへ出掛けることは出來ない。いや六七十まで活きたとても、或は一生、一ヶ所にへばりついて終つて仕舞ふものも尠からずある。又或人は處々を遍歷し、種々な境遇にも觸れながらも、其の性質が鈍いので只本人の皮相のみを見聞して、それで以て一生を「さようなら」にしてしまふこともある。若しくは存外實際にぶつかつて見ると、それがあまり茫漠と大き過ぎる爲めに、何が何だか薩張捉へどころもないやうに感じて、夢を見たやうな思ひで以て終つてしまふこともある。例へば小兒が勸工場へ行つて大きな玩弄御店の前に立つと、何でもお前の好きな物を買つてやらうと云はれても、餘り夥しく欲しい物が有り過ぎる爲めに眼移りがして、まごついて、何れとも決しかねて、とんだ詰らぬ物を買つて貰つて歸ることがあるやうなもの。時としては田舍の人などは初めて都會へ出ると、其のだゞつ廣いのに驚かされて、眞相を捉へるどころか、乖ねて話しに聞いただけの事さへも呑込まずに歸ることもあるためし。「百聞一見に若かず」といふは眞理ではあるが、其の人の頭が餘ほど、コンプレヘンシイヴ(博大)であるか、又は一瞥して全體を捉へる直覺力でもなかつたら、實際に當ると却つて一切が分らなくなつて仕舞ふ。目に見、耳で聞く事ですらさうであれば、幽玄にして深淵な世相の眞髓、奥妙にして不可思議なる人情の秘密などとなつては、中々五年や十年や二十年其の實際に觸れたとても分るとてない。私なども幾度か失敗し、今もまだ落第中であるから諸君も多少、同樣な經驗があらうと思ふ。現在目のあたりの人生(ライフ)といふものの、更に縮めていへば我々自身に關するとすら其の實如何なるものであるやら中々以て分らぬ。今の學問をする若い人達は、兎もすれば輕々しく口を開いてヤレ宇宙觀の、人生觀のと容易げに言はれますが、日本だけの、明治だけの現在だけの、ライフすらも中々分らぬではないか。日本のライフどころではない。いや明治の、東京のライフどころではない。自分の一身すら分らない。さればこそ聖賢といはれる人ですら、「五十にして命を知る」などと申されて居る。「五十にして命を知る」と云ふ言葉には、どの位深い意味が含ませてあるか知らぬが、マア我々が俗に解釋する所では、人

生に關する眞理を會得したといふ意味と見てもよからうと思ふ。あの位な勝れた人ですら、五十にして始めて人生を支配するところの大法を呑込んだと云ふ位であれば、大概の者は五十にして四十九年、六十にして五十九年、七十にして六十九年の非を知る位がならはし。幾度も〳〵同じ過を繰返して煩悶して、苦惱して、反省に反省を重ねて、やつとのことで彷彿たる人生の片影を捉へ得る位である。して見ると人間の智惠といふ奴も餘り頼みにならぬものさ。それといふは畢竟は世界が餘り大き過ぎるからのこと。云はゞ大きな森を横から見るやうなもので、或は眼前にたつた一本大きな杉の木が立つて居るばかりでも、もうそれが眼を遮つて、それで全林の眞相を見せぬともあらう。或はずつと立離れて見ようとすると、折あしく霧が立掩つて茫として際涯が分らず。若しくは又如何にも遠く小さく見えて、何だあの位の森ならたつた一掬だと見くびつて扨大あてはづれ、傍へ行つて見るとどうしてどうして、八幡知らずの藪同然で、始末にをへぬ。一番よいのは上から瞰下すのであるが、上から見るには何か方法を講じなければならぬ。普通人間の持つて生れた本能丈では分らぬ。或は風船に乘つかつて中乘をして上から見れば餘ほど分り易い。或は望遠鏡を用ひるがよい。所が望遠鏡とか風船とかを用ふることになると、是れはもう考察の結果で所謂學問のお庇である。窮理の力を以てして色々の方面から方法を研究して行つて、大きい物を小く、小いものを大きくしたり、羽根のないに係らず飛行したりするので、只の經驗ではない。即ち經驗をして有効ならしめんとすれば學問といふものが必要になつて來る。若し單に實際に觸れたばかりで、只の經驗だけで、宇宙の眞相や人間の本然が分るものなら、科學も哲學も要らぬ譯だが、理智を以て、して色々研究して見なければならぬ仔細があるので、そこで智惠を磨かなければならぬ。第理といふ一つの門戸を開いて、そこからも這入つて行く必要が生ずるのである。さて此の門から往來して見ると是が大層結構に思はれる。大概の事は明かに分りさうにも思はれる。經驗の足らざるを補ふに學理を以てする。かくすれば天地人間のことあらかた分りさうに見える。それ故にこそ世間には科學、哲學の萬能を唱へる人々もあるが、まだそれは本當でない。前回にも述べた通り、學說といふ門は、是れは表門で、玄關から頼まうといふ格である。是れも必要ではあるが、そればかりではいかぬ。まだ裏門がある。其の裏門は何かと云ふと文學藝術の門、是れが此前に鑑賞的態度と云つた詠嘆の態度から這入つて行く門です。智惠で分析して、解剖して、細末にして取調べることも必要であるが、碎かずに、割かずに、其儘で引括めて

ボカ〳〵と溫く、馥郁と香りのある、つやつやとして居る儘のものを眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味つて見ねば本當の事は分らない。之れを名けて感得門即ち感じの力で事物を會得する門を開かねばならぬ。而して其の役廻りをするものは即ち文學や藝術である。固より聰明な人が實際に觸れる場合には、常に此の二法を兼備して居るならひであるが、聰明な人でない場合には、よしや幸ひに經驗する機會を得ても感得力が十分でない爲めに、文學、藝術を以て其の足らざるを補ふ必要は生ずるのである。さてさういふ場合にはどうしたらよいかといふに、外に法はない、只文學、藝術あるのみである。前回にも申したが、例へば親の情と云ふやうなもの乃至は戰爭の慘禍といふやうな事、これらは十分に經驗せぬうちは分るものでない。よしや無慚なといふ事程は理論上では幾らも知つて居るとしても、其の無慚といふ事を眞にトルストイが感じて居る程に感得して居る人は少ないであらう。トルストイとても自分で戰場に出て經驗するまでは、さまでには感じなかつたのであらうが、自ら經驗して深く感得するに及んで今の絶對非戰主義の態度を取るに至つたのであります。詩人肌のトルストイの聰明と直覺とを以てすらもさうである、況んや他の凡俗に於てをやである。經驗せざる人に之れを經驗したると同じやうなる感得を得しむること、或は少しく言葉を強めて云へば、經驗したるよりも猶一層靈活に感得せしむることを得る方法がありとすれば、それは特り大文學、大美術が有する所の特功であると申してもよいと思ふ。之れを名けて經驗以上と云ひたい。普通の人間では生中大實際にぶつかると、子供が玩弄店の前に立つたやうに、田舍の人が都の盛場に立つたやうに、何等會得した所もなくて躊つて仕舞ふやうなことがあるが、美術、文學はそれを救つて、いはゞ大宇宙を小さく縮めて手ごろにして見せる。餘程目の悪い者にもほゞ大體を見分けられるやうにして見せる。といふと、そんなら譬へば望遠鏡でも逆まにして見せるやうなものかといふ人があらうがさうではない。そこが美術や文學が寫眞とは違ふところである。寫眞といふものは其儘取るから上手の寫眞師に取つて貰つても、要するに其の景の眞髓を知ることは難い。美醜ごつちやに映つて居るばかりでなく、どう撮つたところで部分だけの話、全分を縮寫する法は寫眞術の得せぬところである。然るに繪師に頼むと、一枚の紙の中に巧に全景をも寫し出す、肝要の部分と肝要でない部分とを取捨するからである。松島の景は八百八島悉く美ではない、あの中の眞の美なる島は或は數十にも足らぬかも知れぬ、或は十島或は五島で全松島を代表せしむるに足るかも知れぬ。數百ページの一小冊

子の中に人間の全相と云つては無論言ひ過ぎだが、人間相の或肝要なる部分、少くとも男女に關する部分、親子に關する或肝要なる部分位は縮寫されて而して實際よりも一段明晰であることも出來る。是れが私は美術、文學の一番本領とする所だと思ふ。即ち或意味から云へば經驗以上、實際では迚も認め得られない事を活眼の文學者、美術家は粹を拔き、言はゞ蒸餾器にかけて醇の醇なるものとして呈出して呉れる。實際は量り知られぬ水の如きもので酌取りやうもないものであるを、美術、文學が巧みに蒸餾して僅かコップ一杯位の分量にして、剩へ味まで附けて、サア召上れといつて持ち出す。旨いのみならず其の或種類に至つては、仄かに言ひがたい一種の滋養分もあつて大に精神を鼓吹し稗益する所の働きもある。此のやうなのが先づ、我々の平生信ずる所の文學や藝術の本領である。併し是れは文學、藝術の効用とは自ら違ふ。文學、藝術の効用といふことに就ては又別に終ひにお話しをする積りであるから、茲では只本領だけをいふのである。さて此の本領を利用して色々の方面に向けることが出來るが、本領其物は飽くまでも「味ひ」を知らせ「趣き」を知らせるに止まる。然り而して文學、藝術の最も肝要な大切な點はどう云ふ所にあるかと云ふと、其の所謂「味ひ」や「趣き」が只一時の「趣き」や一時の「味ひ」たるに止まらずして、千古不易、東西遍通の趣味であることである。苟も文學と云ひ、藝術と云ふ限りのものにあつては、何等かの人生又は自然に關する「味ひ」が寫されてあることは勿論であるが、尙往々にして唯一時の味ひ、一時の趣きに過ぎないことが多い。是れは科學、哲學の方面に於ても同樣で、苟も科學、哲學といふ本領から云へば、千古不易の眞理、東西遍通の眞理のみを分析し、解釋し、綜合し、一括して世に示すにあるべきだが、尙實際は必ずしもさう行つては居らぬ。例へば十八世紀頃の科學は今日から見れば未熟千萬な間違だらけのものである。然るに當時はそれら植物學者や、動物學者や、經濟學者や、政治學者の論じた所を以て殆んど動かすべからざる遍通の眞理の如く信じて居たこともあつたが、それらは眞理の斷片であつて決して圓滿の眞理でないといふことが段々分り、さて十九世紀になつては更に幾段かの研究を進めて、種々の哲學大家、科學大家が張出した。それで圓滿な眞理が分つたかといふに、いや〳〵今日の學說はた眞理の斷片であつてまだ〳〵全豹は分らない。そこで今日になつては、扨々人間の智惠といふものは限りのないものである、固より今日の科學や哲學を決して〳〵輕蔑すべきではないが、さりとて今我々が知り得たるところはまだ〳〵宇宙の眞相には違いものだ、兎も角も全相は分つては居ないと觀念して來た。要するに我々共今日の人間は

今日相應の事を研究し得て居るに過ぎない、十八世紀は十八世紀の智慧相應の研究を爲し、十九世紀は十九世紀の智慧相應の研究をしたのである、だから科學や哲學は其の時代相應の智識を修める庫たるに外ならぬものと思はねばならぬ。と先づ斯う云ふ樣な風に誰も彼れも心附いて來た。昔は宗教家ばかりではなく、總ての學者とか識者とか云ふ者は兎角頑固なものであつて、自分の云ふことは金輪奈落、生へぬいた眞理のやうに剛情に言ひ張つたものであつた。今も猶さういふ連中がないではないが、眞の學者肌の人は概して穩當である雅量がある。人の說をも容れる。研究的態度を取つて悠然として考へる。尤も時と場合とに依つては學者だとて、國家若しくは人道の爲めに猛進して水火も辭せないこともあらうが、平生は飽くまでも研究的態度で、成程君の云ふことも或は一眞理かも知れぬが僕のいふことも目下は相對的智識を標準として言へばマア眞理と假信せざるべからざる云々の理由があるなどゝ云ふ位の事、即ち條件付、斷片的の眞理たる外ならぬとする。それと同じことで、文學、藝術に寫されたることも、往々にして其の時代々々の特殊の鑑賞力で味つた自然や人間の趣味に過ぎないことが通例である。例へば德川時代の人が見て美なりとしたのは德川時代の鑑賞力の結果たるに過ぎない。歐羅巴の十八世紀の人

が頻りに持て囃した所の美は、矢張十八世紀的と云ふ一つの特殊の形容詞の付く鑑賞力の結果たるに過ぎないといふが通例。なんと是れはさうあるが當然ではあるまいか、彼の一つの林檎を食ふとしても食前と食後とでは味感が違ふであらう。甘い菓子を食べた後に林檎を食ふと、酒を飲んで口が渴いた時に食ふと、腹の減つた時に食ふと、滿腹の時に食ふとでは確に同じ林檎であつても食べる人の形體上、精神上の情態で大きに違ふ。肝癪を起した時に食べるのと、滿悅の時に食べるのでも違ふ。愉快の時に食べると何でも旨いが、大不平の時には自分が平生好な物でも不味くなる。人間といふものは常てにならぬものだ。彼の學者といふものは目を古往今來の總ての大事相に配つて冷然と落ち附いて居るが本領の者である、それですら一時の社會の傾向に惑はされて妙な觀察をしたり、妙な判斷を下すことがあるためし。況んや感情專門、直覺專門の文學家や藝術家に至つては、而倒なことをして居ないて直覺で濟ますから手取早いこと此上もないが、其代り頗る危險なものだ。其時の感じ次第で違ふ。甚しきに至つては辛い物を甘いと感じたり、甘いものを辛いと感ずることも間々ある。それが所謂天才の士であれば百發八十中位まで行くが、中以下の凡天才であると危ない。一例を擧ぐれば彼のシエークスピヤやホーマアの如き

人が書いたものは今を去ること三百年以前の者であつても、二千何百年以前の作であつても、我々が今讀んで見て何んだか我々の事を見越して書いて居るのではないかと思ふ樣に不易の趣味に富んでゐる。それが即ち天才の魔力だ。併しながら東西とも多くの作はさうでない。德川時代の作でいへば、ソレ天明以後に出來た黃表紙、こゝにやく本のたぐひ、をかしい面白いものさ。併し今日から見ると、ほんの溫泉場の體屆まぎらしに過ぎぬものである。それをば鬚をくひそらした大男が全力を注いで著作し、又全心を傾けて愛讀したかと思ふと今では奇怪に感ぜられる。併しそれが時勢の然らしむる所。矢張あの時分の鑑賞力の結果であるのさ。斯う考へて見ると、文學、藝術の本領も甚だ覺束ないもので、多くは一時の料理鹽梅で出來て居るもので、只稀に比較的不易の割烹法で出來て居るのもあるといふまで。そこが即ち疑惑の生ずる基である。蓋し科學、哲學の書を讀むにしても、悉くそれを信ずれば書なきに若かずで、其の中に幾分の眞理はある、幾分か眞理の斷片が籠つては居るが眞理の全分ではない。兎角古へから學說が純粹の學說で通つてしまふことは少ないもので、知らず〳〵の間に經世經國の目的で說かれて居ることが多い。即ち其の當時の疲弊を濟はうといふ應用の精神が混じやすいから、例の人を見て法を說け、病に應じて藥を投ずるといふ遣り方に流れる事を免れない。そこで其の時代には合藥であつて慥かに眞理分に富んで居たかも知れぬが、時經つて見るともう利目が無いのみならず少々毒にもなるといふことが屢〻ある。文學、藝術はた同理である。そこで文學の書をお讀みなさるには時勢といふものを能く見て、西洋の書でも日本の書でも、一體此の作者はどう云ふ社會に生れ、どう云ふ時代精神に觸れて書いて居るのか、即ち其の人はどう云ふ境遇に立つて書いて居るか、時代に先じて豫言的態度を取つて居るか、或は時代精神を代表して總括の役目をして居るかなどといふ點を考へてお讀みなさらぬといかぬ。然るに近年、青年達が本を讀むのを察するに、多くは只手當り次第に讀むのであるらしいが、それは文學藝術の與ふる所の眞の利益を得る所以の正當の方法ではない。

要するに文學は自然界及び人間界に存在する所の、或は形あり或は形なき所の「趣き」とか「味ひ」とか云ふやうなものを、碎かずに、崩かずに、有の儘に、溫い儘に、而もそれを引括めて、手ごろにして、煎じつめて、誰にも成るべく分り易いやう、呑込み易いやうにして寫出するものであるといふことは以上の說明で略〻明かでありませう。但し其の「趣き」とか「味ひ」とかゝ果して千古不易、東西通のものであるか、又はほんの一時暫

且の流行的のものであるか、英吉利なり日本なりに特別なものであるか、日本といふにも時と處との細別があるが、日本も德川時代の大坂又は江戸に限つた社會情態、上流だけ又は中流だけの情態と限られてあるのか、或は德川氏時代の江戸、大坂とは限らない、苟も日本人と生れた限りには、神武天皇以來、末は明治百年、二百年の後までも此通りであると云ふたぐひの世態人情が寫されて居るのか、などいふ程度の相違に依つて文學、藝術に種々の派分が生ずるのである。理想とか寫實とかいふ名前が文學、藝術にある。その定義は一概には定めがたいが、或る場合に於ては寫實派といふのは唯一時の流行的のものを寫して居るに止まることがある。而して理想派といふのは往々にして不易といふ所を覘つて、決して現在ばかりに拘泥しないを主とするならひ。併し一概には云へない、理想派の方が存外偏狹で唯ほんの自分の頭に考へ得た所のみを一番よいと頑信して、其の結果寫實派よりも狹くなることもある、尙ほ此の區別に關しては別に述べることにして、文學の本領に關する説明は先づ之れで一段落とします。」

第四　文學の體式

文學を用語や句法の上より分つときは散文體と律語體(詩歌)との二樣式となる。こに語らんとする體式といふのはそれを指すのではない。散文律語の別を問はず苟も文學と稱するもの全體に行渡つて存在する根本の體別を指すのである。按ふに文學の體式はと一口に問はれた時分には、書く人々の心々即ち千差萬別と答へるより外はないが、併し彼の植物を品評するに當つて屬や科で分つて梅、松、竹、柳などと數へ立てる一方なれど根、幹、枝、葉、果實などと植物必具の體式を目安にして大まかに論ずるのも一法であると思ふ。蓋し根、幹、枝、葉、花、實といふ樣な風に分ければ凡そ植物として先づは此の體式の全部又は幾分を有せざる者はないから都合がよい。例へば花と稱するうちには梅も椿も薔薇もある、又根と稱するうちには大木の根も雜草の根もある。即ち根、幹、枝、葉、花、實は植物共通の體式であるといへる。て、是れに倣つて文學の體式を取調べて見ると凡そ三つほどある。即ち自分の感想を言ひあらはすを主とするたぐひの文學もあれば自分以外の事や物や人の上を敘したり寫したりすることを主とする文學もある。さて、もう一つ、自分以外の種々の人物に同化

し、て、言はゞ八人藝を筆の上に描きいだすことを主とする文學もある。東西古今、此の三種に屬せざる文學は無い。

尤も此の三體式は筆にのみ現れるのではない、我々が平生、相談笑する時の言葉の上にも現れて居る。蓋し文學といふものは其の本來をいへば我々が口に言ふことを文にしたものに外ならんから、口に言ふ所はやがて書き綴つたもの即ち文學の姿なのである。されば我々が平生、話をするのに前に擧げた通りの三體式がある。生れた時分には、誰れでも先づ自分本位で、兎角アタイがアタイがと自分一個を主とした感想を吐く。尤も赤兒の頃はまだアタイといふ言葉さへも知らんから、只アー〳〵とばかりいふが、併しその意味は、「乞ふ我に乳を與へよ」若しくは「母よ早く來れ」などいふので、いづれも自分の利害を本位とした言葉である。さて稍や育つて言葉が自由に使へるやうになれば、如何な凡劣な、よしや痴愚に近き子供でも盛んに自分の感想を語る。稀にはそれを爲し得ないのがある。啞者だ。これは是非に及ばん。啞者でない以上はどんな愚な子供でも五六歳になれば自家の感想を洩らす。之れを演說體とも云ふ。演說は上手、下手こそあれ誰れにでも出來る。赤兒でも「母よ乳を與へよ」「汝の乳は旨し」「吾之れを飲まんと欲す」などいふ。此の通りにはいはんが雅俗折衷體に飜譯して見ると斯うなる。文章の方でいふと書簡體に當る。これも亦誰れにでもかける。ドブゾ〳〵式でよければ下女でも子守でも書く。況んや學校へ通ふ子供なら無論自分の意思を人に通ずるだけのことは書き得べきである。序ながら私は今の小學校の作文は氣に入らない。初めから記事文や叙事文を書かせるのは無理な話だ。「教師は人にして骨と皮にて作り」などを教へるよりも、言文一致で有りの儘の感想を書かせる方がよい。「先生今日休にして下さい」或は「今遊びたい」といふことをさ。さうすれば天眞流露の存外教師も及ばぬやうな名文を書くかも知れぬ。で私に言はせると、中學二年までは手紙ばかりで、尤も手紙の中に記事が這入つても論文が這入つても構はんが、それは自然子供の頭から湧き出づるを俟つことにして、體式は飽くまでも此の一人稱式でやつたらばよからうと思ふ。ッイ話が横へそれたが、右いつた譯で此の體式は誰れにでも出來る。之れを名付けて自分本位の文章或は稍むづかしい言葉では述懷體又は抒情式ともいふ。一層むづかしく云ふと主觀的の文章ともいふ。

扨次には自分以外の事や物や人に關することを叙し又は、狀するもの、早くいへば世間の噂や天地の風物を寫すを主とするもの。これは口の方に當嵌めて見ると自分

が親しく聞いた事や見た事、又は受賣の話をするのに當る。エート私が昨日觀艦式を拜見のために横濱まで參りましたところ、かやう〳〵の不思議な現象を觀ました云々、是れにも私とか自分とかいふ言葉が最初の間はまじるが、畢竟するところは自分に關することを語るのが主ではない、むしろ己れ以外の人や事や物に就いて己れの經驗した事を語るのである。尤も己れの經驗した事のみを語るのは往々にして前に述べた類に這入ることもある。隨つて、これは昨日友達の某から聞いた話だが、處は野州鹽原福渡の宿屋で思へがけなくも云々の事件が起つた、時しも秋の末つかたのことで……といふやうな鹽梅の話、是れらが此の第二體式の適例で彼の噺家や講談師などが得意とする所、談話體と名づくべき者。故圓朝や故如燕の話はいづれも自分一身の上の話ではない、エ、鹽原多助と申す拙者の悴などゝは言はない、全く自分を離れて仕舞つて鹽原多助の昔話をするのである。斯くの如きを筆の方では叙事式、若しくは寫景式或は狀物式といふ。希臘のエポスといふのは是れです。景色を叙したり物の形容を狀したり自分の經驗以外の事物を描寫することを主とする。自分の親しく見た景色でも無論よい、只自分が見たといふ事、其事が主ではなくて、事柄其事、景色其物が主である。

さて是れが餘程むづかしい。前の一人稱の方は子供の筆にも出來ることだが、此の三人稱になると子供の舌や筆では先づ出來にくい。昔から支那でも、文章軌範式の文章家の說に依つても、叙事文はむづかしい事になつて居るが成程遣り惡くい。子供でも時としては此の種の話を試ることはあるが、兎角ネーやソレカラばかりで埒があかない。隨分大人にもソノやアノやスナハチの連續で話の筋の根つから運ばぬ人があるものです。演說上手は隨分あるが話上手は尠い。それなればこそ噺家や講談師が生活が出來るので、皆が上手に出來たら彼等の頤が乾上るであらう。口ですらさう、隨つて文章で書くのは更にむづかしい。「今チョット困るから新聞の雜報でもよいから書かせて貰いたい」といふ青年が往々あるがどうして〳〵でもどころか、これが抑むづかしい。寧ろ論說文なら曲りなりにも出來る、蓋し論說は自分の意見を主張するのであるから前の書簡體、述懷體の一種である。隨つて中學以上の程度の學校を卒業した者ならば政治論又は文學論の眞似事位は或は出來る者があるがどうして〳〵雜報はむづかしい。併し雜報にもよりけりで陳腐な舊式小說の文句を眞似て、年は二八か二九からぬ式に綴る分のことなら或は一寸の稽古で書けぬこともなからうが、さういふ虛飾や無駄を省いて簡潔に僅か十行ばかりの內に要

領を得させて而も面白くといふことになると一廉の小説家でも大ぶ垢抜けがしてからでなければむづかしい。其れ故に叙事式は抒情式よりもむづかしい、となつてゐる。それも其の筈さ、我れを離れて我れ以外の事物即ち客觀のものを寫すことを主とするのであるからむづかしい。併しながら又能く調べて見るとどれも〳〵むづかしいには違ひない。演説もむづかしいが其の實手紙ほどむづかしいものはない。あなた方も多少經驗があらう。私共は最も下手で手紙が思ふやうに書けぬ。走り書きに書いたりすると怒つて居ない時に怒つたやうに書けたり、或は大に公平の心を持つて居るに拘らず文言の上ではどうも甚しく偏頗な返事ぶりになつたり、何だか禮に過ぎて追從を云つて居るやうになつたり、或は妙に高慢に聞えたりして始末にゆかぬ。で煎じ詰めて見るとどれも〳〵むづかしいが、さりとて自分のことさへ旨く書けぬやうで其の他の文章が到底よく書けやう筈がないから、そこで植物に譬へれば書簡體、述懷體、抒情式といふのが先づ根幹に當る。抒情式の筆が十分立たなければ、到底叙事や叙景や狀物が眞(まつ)當に出來るものでない。

さて第三の舌の上でも筆の上でも最もむづかしいのが劇式又はむつかしい言葉で主觀兼客觀と名づくる書き方である。これは碎いていへば、そつくり俳優などになつた氣で千變萬化的に自分以外の種々の人物に同化して八人藝をするといふ書き方。此の藝道は時としては子供や無學者もするが、それは徒(はん)の眞似事で、正式には迚も〳〵出來るものでない。なぜならば是れは單に斯う云ふ事があつた、あゝ云ふ事があつたと云つて語るのでなくして自分が其人になつて仕舞ふのである。好い例がないが只外形だけをいへば、舌の藝としては彼の物眞似仕方話が稍や是れに似て居る。噺家などが話すやうに、さながらそこへ當の人物が出て來たやうに「エイ眞平御免んねえ」「誰れだい其處へ來たのは」「エイ私ちでげす」「私ちたア誰れだい」「へイ松で……」と云ふやうな調子に女になつたり、男になつたり「松でげす」といふ時分は松になり、「誰れだい」といふ時分は大屋さんになる。其のうちにお婆あさんが出て來たり、小僧が出たりする。要するに俳優の藝さ。前の幕では加藤清正をやつて徳川家康の野心を疑ふ意味のセリフを言つてゐたのが其の次の幕では徳川家康になつてさてスツカリ言葉も樣子も變つて「あの清正こそ我が勁敵」といつたやうなことをいふかと思ふと、其の次の幕では奥女中になつて出て來る。さて是れは大ぶ骨が折れる藝道であるが。ちようど其の通りなものが文學の方にも矢張ある。それが脚本式、又は劇式といふのである。一例をあげて云ふならばソレ能の狂言、能の方は處々に地の

文といふものがあるが狂言の方にはそれがない。「太郎冠者あるかやい」「ハーッ御前に」といふ風に同じ一人の作者が書いたのであるが、太郎冠者の時は太郎冠者らしく大名の時は大名らしく書き分けてあつて而も普通の小説などとは違ひ、其の間に「來りければ」とか「歸りけり」とかいふ文句もない。尤も狂言の如きは極めて單純なもの故十分の例證にはなりかねるが、一層進んで河竹默阿彌などの書いた脚本になると遉がに種々の人物が相應に特質らしいものを具へて活動して居る。此の書きかたを、叙事式を客觀的といふに對して主觀乗客觀式ともいふ。我れ以外のものを自分にして仕舞ふ書き方である。家康は我れに何の關係もない。團十郎と家康とは親類でも何でもない。然るに舞臺で見ると客觀のものが團十郎の主觀になつて仕舞ふ。家康が團十郎か團十郎が家康か分らぬやうになつて仕舞ふ。鼠小僧が菊五郎か菊五郎が鼠小僧か分らぬ。さういふのを劇式といふ。

さて斯う分ければ古往今來東西南北の文學にして此の三つのいづれかに入らぬ者はないことになる。恰も植物を花のある植物花の無い植物と分てば、それで悉く蔽つて仕舞ふやうなもの。草とか木とか野菜とかいふ風に分てばあらゆる植物が蔽へるやうなもの。專門の人はどんなに細かく分類してそれを又記憶してもよいが、專門以外のものは中途半端は有害無益である、大體でよいから要件だけをすつかり捉へて覺えて置くはうがよいと思つて以上大まかな説明を試みました。

茲まで説き來りましたから今度は文學の上の何か分り易い例を擧げて更に説明をして見ようと思ふ。散文々學の例を引くと長くて不便だから專ら律語の方から引きませう。先づ一人稱の抒情式に屬する律語の例を擧げて見れば尤も短い單純なのを云へば、十七字又は三十一文字位のものもあれば、複雜なのは殆ど數百ページに及ぶ厚い書物にもなる。一々例を擧げては果しがないから最も短い物で代表させても中の味ひは違はないで十七文字の發句で抒情式の主觀的なのを擧ぐれば「夕涼みよくぞ男に生れける」「其角」暑い時に裸體になつて涼んで居るのであらう。女では斯ういふ事は出來ない。尤も今では段々西洋風の究屈なエチケットが這入つて來るから男でも出來ぬかも知れぬ。兎に角是れは其角の濶達な氣質を現して居る。「蝸牛酒の肴に遣はせけり」是れも先づ其角に限る主觀的な句である。大概の人ならヤレ見ともない、早く何處へかはうり出せとも思はうがこいつオツだ妙だと盃を含むなどは江戸ッ子肌の其角だ。「世の中は蝶々とまれかくもあれ」是れも元祿式の主觀的といつてよい。「初雪やあれも人の子樽拾ひ」雪を見て必ずさういふ感が起るとはい

へない、其の人の人格による。「初雪やせめて雀の三里ほど」などといふは普通の風雅人の感であらう。或は歌でいつても「山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心我れあらめやも」固より日本民衆の心は忠君愛國で一貫して居るであらうが、鎌倉時代の武家的個人主義全盛時代に此の心を持つて居るもの、決して日本人全體ではなかつたであらう、「海行かばみづくかばね」と詠んだ萬葉集時代には決して大伴の某一人のみの感想でなかつたとも、朝廷の勢威地に落ちて北條氏の權力大に揚り將軍實朝自らすら傀儡同然に度外視されて居た時代の詠として見ると此の歌は慨かに抒情詩の本領にはまつて居るものと見てよい。或は同じ人の例の百人一首の「世の中は常にもがもな渚こぐ海人の小舟の綱でかなしも」。成程海人が綱引する有樣は面白いでもありませう、如何にも風情ある景色でもあらうけれども、斯のやうに深く思ひ入つた實朝の境涯を想像し思ひやつて見ると、北條氏の爲めに有るかなきかにされて懷懷胸に滿ちて痛憤に堪へぬ折り柄に偶々天の原をふりさけ見て如何にもなんの憂もなく面白げに綱引する海人を見たので、ア、世の中は常に斯う云ふ面白い景色を見て居たいものだ、いつも斯う云ふ風にあつたならといふ感じが起つて一段と自然の美に憧れたのだと云ふ風に解釋して見ると、更に趣きが深くなつて此の歌もまた純然たる主觀の歌となる。誰れでも感ずるザラの感想ではないと言へよう、他の者ならば或は酒を飲んだり三絃を弄んだりするを一段と喜ぶかも知れぬ。或は又「稀に來る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ」妻君を葬つた後其墓を訪うての歌である。稀に夜來て見ると松風の聲が如何にも悲しい、稀に來てすらさうてあるに絶えず苔の下の人は聞いて嘸寂しからうといふ感想、之れも慨かに主觀的である。「世を捨てゝ山に入る人山にても尙憂き時はいづち行くらむ」。是等も一種の人生觀といふやうなものがほのめいて居る。其人が深く心に感じたことを詠つて居ると思はれる。

同じ發句でも是れは抒情ではない、叙事と見た方がよい、或は寫景と見た方がよいと思ふのがある。例へば「四五本の竹に奥あり朧月」。これは誰れも見てさう感じさうな景で客觀的である。其の人ひとりの特別の感情ではない。可愛子に旅をさせるとか、負けるは勝つとか、あゝ云ふ諺も一人特有の感ではなくて有らゆる人間の共有の感想である。僕も夙からさう思つて居たが巧く云ひあらはせなかつたと誰れもいふであらう。「ぽた〳〵と椿落つるや朧月」。椿の落ちるのに春の美を認めたは或は其の人の烟眼であらうが、誰れしも此のいひあらはしに對して異存のないところ

を見ると是れ將た客觀詩である。「明月や小さくなりぬ伊勢の海」。說明を要しない。「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」。誰れが見ても秋の景色はかうだ。「白妙や動けば見ゆる雪の人」。是等も唯の有樣。或は「夕立や草葉を掴む群雀」。宛として日本畫だ。

總じて日本の繪は多く客觀的で抒情的の繪が少ない。西洋の繪には間々抒情的な繪がある、其の作者の特質や人生觀と伴つて離れない樣なのがあるが、日本の繪には少ない。「桃咲くや達磨大師も尻もだえ」などは或解釋からすれば抒情式ともいへようが、ボカ〳〵暖くなつて來る春の季節を言現した點から云へば只の叙事である。「負うた子に髮なぶらるゝ暑さかな」。是れもなべての女の情を言現したに過ぎない。「風鈴もだんまりて居る暑さかな」。唯の叙事式です。或はずつと鄙びて「食客三杯目にはそつと出し」「食客あらしに屋根を這廻り」此等は單に客觀的だが「食客出さば出る氣で五杯食ふ」などになると稍や主觀的で「食客なれども僕は五杯くふ」などになつては是れは全くの例外だらう、全く主觀的だ誰れでもさうだとは言はれぬ。

次には劇式の方だが是れには少々困る。短い例の擧げやうがない。我が國には本當の劇の體式を具へた文學が割合にない。之れは前にもいふ通り地の文無しに只人物の對話ばかりで成立つて居る一篇の物語を指すのだが、これは稀に或る種類の

落語に於て見る、それから能の狂言、それから芝居の脚本。芝居の脚本といつても淨瑠璃の方はいけない、淨瑠璃はあれは劇式ではなくて一種の叙事詩です。從來文學を論ずる人が往々にして西洋には叙事詩といふものがあるが日本には無い、支那にも殆んど無い、日本では萬葉の浦島の歌位であるなどといふことを申す人もあるが、これは如何はしい。私の見るところによると彼の謠曲からが一種の叙事詩です、稀に謠曲の中に地の文の更にないのもあるが多くは叙事寫景が主となつて居る位。それから近松竹田等の淨瑠璃とても同じことで本體は慥かに叙事的、英語でいへばドラマチック、バラッドとても特稱すべきもの。さういふ譯であるから本當の劇式に綴つたものといへば日本では能の狂言、つゞいては所謂狂言作者等、鶴屋南北、河竹默阿彌等の書いた脚本が先づそれに當る。併しながら西洋のは往々にして平仄を整へ又は韻までも押して綴つた立派な長篇の詩、日本のは只の散文、剩へ文學上の價値に乏しいから同日にして論じがたい。

あちらでは古くは希臘時代からさうだが、中古時代になつても或は英吉利或は西班牙の各國に於て新式の芝居が起つたが、是れ將た叙事詩脈は少しもない、純乎たる劇式のもので、全く個々別々の人物が生動してゐるやうな問答ばかりで出來て居る、況

んやシエーキスピヤーなどの如き大才の作つたものとなつては人物めい〳〵のセリフがおの〳〵一篇の抒情詩かと思はれる程に作者を離れて儼たる主觀式のものになつて居る。ハムレットといふ貴公子の臺詞を讀んで、さて其の次にクロージヤスといふ奸佞な國王のを讀むと丸で別人の肚の中に這入つたやうに感ずる。恰も萬葉集を開いて、先づ人丸を讀みやがて憶良を讀むやうで決して混同しがたく變つて居る。これが劇は一面人物のセリフの上より見れば抒情詩の集りで他面筋の運びの上から見れば一篇の敘事詩で、そこで主觀的であると同時に客觀的、即ち主觀兼客觀式だといふ所以で、是れがまたドラマの他の詩體よりも面白い所以、高尚な所以である。しかし此の千變萬化のうちに統一を保つて筋を貫徹し讀者の感興を散漫ならしめないやうにすることは中々以て容易なことではない、其れ故にこそ劇は文學の頂點、美文の極致となつて居るので、隨つて又皆が之れをアンビションの目的として、試みるが誰れも失敗する。敘事よりも幾段もむづかしい。敘事は小說などの綴りかたを最上乘とする。よし小說は巧く書くことを得ても劇は書けない、殆んど全く呼吸が違ふのである。併しながら茲に一言注意して置くべきは、同じく小說といつても十九世紀になつてからのは大ぶ趣きが變つて來て、劇的趣味を取り入れるやうになつて居るといふことである。何處の國でも昔の作は小說は劇とは違つたものである、出て來る人物が一々活躍するといふほどのものでなかつたのである。尤も劇式に書くといふと或は誤解して目に訴へたり耳に訴へたりする境遇や場面を選び、端手やかなことを主にするものかと解釋する人もあらうが、さうではない。こに云ふ劇式は人物の性格を深く細く寫すといふ意味で、單に形式の上からいふとヤハリ劇式とは大ちがひ。で、小說が上手だからとて芝居が巧いといふ譯には行かぬ。

第五　文學の內質

文學の內質は人の心に思ふことの人每に異なるが如く異なるべき筈のものである。されば こゝに內質といふのは極めて大まかな意味でいふので、言はゞ物の味ひを分けて上戸好みとか下戸好みとかに分類するやうな手心の分け方たるに外ならぬ。そのやうに心得て讀んで下されたい。

まづ文學の內容を單純なのと複雜なのとに分ける。單純といふのは如何いふたぐひのを指すかといふに、前にも申した通り、凡そ文學は主として鑑賞的態度の結果であるから、物を打眺めて「あはれ〳〵」と感じたばかりの所が本體なので、それへ色々の考案や理窟や、想像や、瞑想や、願欲希望が加つて竟には複雜な文學も出來るのである。が、中には單に「あはれ〳〵」と打眺めた其の當座の感想のみが現れて居る至極單純なたぐひの文學もある。殊に我が國の歌俳諧の如くたつた十七文字であるとか三十一文字であるとか、或は支那の五言絕句、七言絕句のやうな體式の頗る簡略なものになると、勢ひ單純にとゝまりがちである。總じて世の中の人事が今日のやうに煩雜多端でなかつた頃には人の考へもそれにつれて大まかであり單純でもあるから、何

處の國の文學も上代のは此の單純な部類に屬するのが多い。然るところ社會狀態が追々複雜になり、現に今日の場合のやうに東西共に苟も文學に志すといふ程のものは、多少顯著な自意識を具へて多少の希望、多少の主張、多少の人生觀めいたものを頭に持つて居る時代となつては文學の模樣が大ぶ違はざるを得ない。思想が複雜になつたゞけに體式をも擴張するの必要が生ずる。十七字や三十一字では其の當座の感じ丈でも言ひ盡されないと、いふ場合もあらう。「これは〳〵とばかり花の吉野山」。固より此間に多少の巧緻もあり餘韻もあるが、これらは先づ打眺めた其の儘の感じを敘したもので單純である。或は「見渡せば、眺むれば、見れば須磨の秋」。勿論餘韻はある、多少の想像、多少の瞑想も加つて居るが、而も尙ほ單純と見てよからう。或は「によつぽりと、秋の空なる富士の山」。是れも打ち眺めた儘の姿が眼目。「さてはあの月が鳴いたかほとゝぎす」。是れもいづれといへば打眺めた其の時其の場の只の景色。彼の「唯有明の月ぞ殘れる」に比しては內容が少ない。「あしびきの山鳥の尾のしだりをのながゝし夜をひとりかもねむ」。思ふ人に遇はれないで長い〳〵夜を只一人で寢るのかなあといふ意だけは十分に現れて居るが、先づそれ丈で其の眠られない爲めに特にどういふ煩悶を覺えてゐるかなどいふことは聊かも寫されて

ゐない。如何にも待ちこがれたやうな趣は見えてゐるが太だ漠然として單純である。譬へば武藏野の原などを遠方から見たやうで、廣いことは廣いが、漠として夕月が仄かに照らしてゐて只何となくなつかしいが、只それだけ。概して三十一字の歌の多數は先づ〳〵比較的單純な部に入れてよからうやうに思ふ。

さて複雜と稱する部類の作はと云ふに、これには想像や、瞑想や、考察や、窮理的態度が加はる。當の景象を詠ずる以外に多少の願欲や希望が加はる。時としては高い遠い理想などに憧れ之れを實にしたいと煩悶するの意が籠る。人生觀とか世界觀とか倫理觀とかいふやうな哲學的觀念が寓せられて居ることもある。例を擧ぐれば シエレーやウオルヅヲルスなどの詩の中に籠つて居るやうな、又はテニソンのインメモリヤムや、ゲーテのフアウストなどのやうな、あゝいふのを總括して複雜な文學といふのである。さて斯う解釋して見ると、我が國の文學、就中歌とか發句とか稱するものは兎角單純に傾いて居る。散文で綴つたものでも古文學は比較的單純である。併しながら同じ三十一文字でも「願はくば花の下にて我れ死なむ」などになると流石に西行が自然に對する特別の心持がほの見え、兼ねてそこに安心立命の影も見えるやうで大分複雜に讀まれる。「世を捨てゝ山に入る人山にても尙憂き時は何處行くらむ」。これらもやゝ複雜である。山に這入つて厭になつたら何處へ行くぞと尋常の厭世觀を破したところ一理窟で只の詠歎ではない。單純と複雜の區別は畧〳〵右に言つたやうな譯で單純の部は敢て管々しく再說する必要もなからうと思ふが、複雜の部は以上申しただけでは或は明瞭でなからうと思ふからちと大ざつぱながら更に二種に分けて辯じて見ませう。

複雜な文學を假に二類に分けて見ると、大體に於て得意滿足の意氣をほのめかしてゐるのと、不平不滿の心持を洩してゐるのとの二種になる。陰氣だちと陽氣だちとの二種になる。それはどうしてかといふと、凡そ人間が天地間の事物に觸れて之れをあはれ〳〵と打詠めた折から、その感じに何等かの想像考察が加はつた時分には必ずや何等かの願欲が生ずる。例へば或一物を見て之れを美しいと思ふ途端には其の何に似たるかを想像し、其の由つて來る所を臆測し若しくは是れは果して何等かの役に立つか立たないかなどと考ふるに至り、軈てはそれを利用しやうといふ念も起る。詩人藝術家は俗人に比して感情や欲望が一段と激切な次第ゆゑ詩るところは自然や人間に對して何等かの願欲希望を起さゞるを得ない。自然の美を愛するの餘り人生が一段と樂しく感ぜらるゝこともあれば人間が頗る醜く穢らしく感

ぜらるゝともある、隨つて樂てたくなつたり、改良したくなつたりする、之れらを名付けて願欲といふ。ところで願欲が遂げられさうなれば得意であり滿足であるが、然らざる場合には煩悶し、苦惱して不平不滿といふ結果が生ずる。さても〳〵難有い時代に生れ合せた。今日の社會は比較的先づ〳〵結構である、四海波靜かな太平無事の天下だ、どうか此の儘維持したいものぢや、千代に八千代に此儘にあれかしといふ意が當の文學に反映してゐるやうなれば、其文學は名づけて滿足派の文學といつてよい。然るに、あゝ〳〵是れは迚も堪へがたい狀態さて〳〵あさましい世の中となつて來た。今の社會は墮落の極といはねばならぬ。いや本來此の世界は厭離すべきものである。かゝる世界に住んで行かなければならぬとは情けない。人間の苦を除くために寧そ世界を絶滅してしまひたい、若しそれが出來ぬならば、寧ろ相ひきゐて自殺してしまひたいなどいふ無分別な破壞的な感情が反映してゐることもあらう。蓋し文學家藝術家は實業家のやうに着實でない、兎角激し易く、常識に乏しく、先見の明を缺き、毎に一時の感情に支配されるから、尙更さういふ自暴自棄の感じが起り易い。さて得意滿足の文學は、外の言葉でいふと或は保守的ともいへる、今の有樣を其の儘守つて行くことに安んじてゐるといふ意で樂天的とも稱せられる。尤もいつの世、如何なる時とても、何事につけても圓滿完全などいふことはあらう筈はないから、如何な呑氣な樂天的な作者でも、內心には多少の不滿不平はあらう筈ゆゑ、得意滿足といつたとても、勿論大體の話、比較的たることは言ふまでもない。どんな溫げな家庭にでも、どんな氣樂げに見ゆる細君にでも何等かの不平や苦勞があるならひ。併し十日廿日とツイ其の事を忘れて居ることが出來れば先づ得意滿足の部類である。如何にある時は涙を流して泣くことがあつても、笑つて暮す日が稍や多いやうなれば先づ樂天の方だ。それ彼の子供といふ奴はよく泣く奴だが、先づ總て樂天の方に入れてよい。直ぐに涙が乾くからだ、空氣銃一つで今泣いた鳥がもう笑ふからである。眞の不平家は迚も〳〵そんな譯には行かない。今更どんな福祿をもつて慰めても、どんな盛譽を與へて和めても迚も〳〵そんな小刀細工では彼れの不滿足を醫する譯には行かない。彼等は若干の業因によつて心根が妙にひねくれてしまつてゐる、然らざれは根深く執念く世の中を悲觀してしまつてゐるので、前の樂天派に對して言へば常に厭世的の傾向を抱いてゐて一日片時も此の世に甘心してはゐない、隨つて現在に安んじては居ないこと勿論だから、出來るものならば現社會を革新したいといふ念がある。どうかして根本的に改めたい、それが出來ず

ばせめて打破して仕舞ひたいと思ふ。或はさほどの元氣がないまでも、只兎角現世の醜い方面ばかりが目について、それが罵りたく嘲りたいといふ氣が附いて廻る。要するに古今東西の文學を大別すると、ほゞ此の滿足と不平との二種に分れる。概して太平無事の世に出來た文學は得意滿足の影を宿してゐて、其の傾向は保守的樂天的沈靜的、安住的である。而して當代の文明が極點に達して漸く爛熟し腐蝕せんとしたる時分には、兎角其の文學に不平不滿の氣脈が現れはじめて革新的悲觀的厭世的活動的の傾向が盛んになる。文學家美術家は之れを譬ふれば、バイカル湖などの氷の最も薄い部分にあたるいて、餘所はまだ厚い〳〵氷が張りつめてゐて車も通れば馬も通る陸軍を汽車で輸送することも出來るやうに堅い、然るに特り文學家、藝術家に當る部分は初手から氷の張り方が薄い、されば一陽來復し南枝將に綻びんとする頃になるともうそろ〳〵ゆるみ初めてジメ〳〵ガラ〳〵と少しづゝ崩れ出す。春を知らせる。時候の變るのを知らせる。併し外の氷共は見て驚き怪やしむ。或はさて〳〵薄弱な奴らだなど頭から嘲り罵つて輕蔑する。或は「季ちがひだ」などゝいふ。どうだ見ろあの薄氷めは。扨も薄ぺらな奴、生ぬるい奴ではないか。もう溶けやがつた。薄志弱行、泣蟲、おこり蟲、いろ〳〵なことをいふ。時としては又人によつてはさう罵り辱められて眞に一言もない、意氣地のないのもあるが、又場合に由つては罵り嘲ける方が大間違ひで時勢おくれであるともある。蓋し詩人藝術家は非常に感受力に富んでゐるから凡人より遙に先に感ずる。例へば例の佛蘭西のルーソーといふ人、英のヒュームは評して、彼の男は譬へば嚴冬の風雪の中へ着物もシャツも脱せた上に、皮膚さへも引き剝して仕舞つて、そうして放り出したやうにそれ程に感じ易い男だと云つたが、適評でそれほどに感の鋭く激しいルーソーであればこそ歐羅巴全土の眠り未だ醒なる時分に、あのやうな破天荒の說を立てゝ億兆の視聽を駭かしたのであらう。固よりルーソーの議論で革命が起つたのではないは無論だが、衆に先んじて革命の氣運を豫言したとは云へる。これらは不平派文學の最も適當な標本でありませう。

さて一歩を進めていふと一概に滿足派といつても、見識の高下もあれば滿足盡梅に深淺濃厚が有らざるを得ない。例へば當代の現實其の物に滿足の意を表して居る普通の良民風のもあれば、流石に現實には滿足せねども凡そ何事も理想通りはいかぬならひと悟り、現代の傾向は先づ〳〵善き方であるからと諦めて、言はゞ當代の政治上の理想や道德上の理想に對して滿足の意を表して、そこに安立して居る者もある。

右のうち當代の現實に滿足してゐる者の標本は我が天明以後文化文政頃までの文學などに好く現れて居る。裏面にはどのやうの暗潮が流れて居たにもせよ文化頃までは天下太平、四民安堵の有樣である、尠くとも都會の傾向は樂天的である。蜀山人一派の狂歌や全交、喜三治、京傳等の黃表紙が歡迎されて居た時代である。蜀山人は當代のドクトル、ヂョンソンである、而も其の文學者としての本領は狂歌で、而して其の政治觀がタカヾ「ぶんぶと云つて夜も眠られず」位のところ、それで最も氣骨のある部類だといふので以て如何に呑氣千萬な時代であるかゞ分るではないか。前にも申したが彼の黃表紙や洒落本といふ奴は凡そ何百種あるか分らぬがイヤ私共が眼に觸れたのはホンの一部分に過ぎぬ、或は殆んど千種にも及ばかも知れぬが、其澤山ある黃表紙や洒落本を當代の若紳士連が、所謂半可通の若旦那が出版の度毎に恰も今日の新聞紙を讀むが如くに爭つて買つて讀む。今の新聞紙は讀み放しだがあの時分は何遍も讀んで或はバイブルの如く常に暗誦して口にした蕩樂者もあつたであろう。或は彼の艶冶郎などの眞似をした手合もあつたらうと思ふ。あれらは悉く大滿足大樂天の作である。現世を此上もない結構な世と見て滿足し、少しも不幸を感ぜぬ樣が見える。尤も是等は滿足派のうちでも俗な部類。但し斯ういふ例は我國のみならず西洋にもあるとて十七世紀から十八世紀へ掛ての佛蘭西や英吉利の文學が即ちそれだ。不平はあつても個人的、部分的で、大體に於ては先づ滿足の形。ラシーヌ、コルネーユ、モリエール、ボアロー等の文壇乃至ポーリングブロークやポープやアヂソンやスヰフトの時代がそれだ。其頃の英吉利の文學者は思へらく、何といつても今の英國位四滿完全に近い國はなからう、尠くとも前代末聞だ、今の文壇は須らく我がオーゴスタン時代と稱すべきだなどゝ自惚れてゐた。オーガスタン時代とは羅馬のジュリヤス、シーザーの養子のオクタビヤスが羅馬國を統一して家康のやうな役廻りをして文運の隆盛になつた時代をいふので、取りも直さず文學藝術ゐの全盛期といふことである。以て英吉利人が如何に得意で現代に滿足したかゝ分る。固より其時代にも激しく社會の缺陷を訐いて嘲り罵た作者もあつたがそれは言はゞ例外、其他は譏るにしても消極的に小さく諷刺するばかりで、是非かやう〳〵に革新せざるべからずといふ程には切つて出ない。畢竟是れでは到底堪へられないと思へば革新の志も起るわけだが、當時の文學者にはそれほど眞面目なのはなかつた、只社會の皮相に浮ぶ小さい個人的なアラをほぢくり合つて居る氣味なので、恰も我邦の文化文政頃の文學に似てゐた。こんにやく本や黃表紙にも多少の

諷刺派は範つてゐるが、要するに筆の先の仕事で世の中には斯う云ふ愚かな淺ましい手合もをりやす、何と世間は廣いもんぢやあげいせんか位のところ。つまり蹉躓し、絶望し、悲しみ怨み怒り狂つたとゞのつまりの八つあたりといふ諷刺嘲罵ではなくして、同胞の弱點を內職の喰物にしてゐるたぐひが比々是れ。

さて此等滿足派の文學を更に大別して見ると、現代を謳歌する者と、直寫する者と、醇化して寫すことを力める者と斯う三種に分れる樣である。第一の例は十返舍一九の「膝栗毛」など。彼の彌次郎兵衛、喜多八は五十三次を股にかけての極樂情蛉てんと面白いの一點張で背後にどの樣な怖ろしい氣運が動きかけてゐるやら草枕の夢にも思ひついては居ない、一方には蒲生君平とか高山彥九郎とかが蹶出しかゝつて居る時代であるのに一切お構ひなし。彼等は當代の現實に滿足して居るのみならず醉ひ浮れて謳歌して居ると言つてもよい。黃表紙、蒟蒻本の連中もまた此の亞流だ。或は又謳歌とまでは當代に心醉してゐないが、只有の儘に寫實の筆を振つてゐる作者もある。例へば元祿の昔へ溯つていへば西鶴などは先づ寫實です。勿論多少の批評や諷刺が範つては居るが、どちらかといふと寫實の氣味である、五人女や男色大鑑はいふまでもなく一代男や一代女なども諷刺としては甚だ手ぬるい。さりとては謳歌といふほどに呑氣ではない。それから八文字屋、江島屋なども先づ同調子で「後家氣質」とか「番頭氣質」とか、概して有の儘の事蹟のあらましを叙事式に寫して居るのだ。何と妙なもんでござりますね、世の中は千差萬別種々樣々な人心ではござりませぬかいといふ調子で筆を採つて居るらしい。或は降つて文化文政時代になると、式亭三馬、これは頻りと浮世の惡口を書いて居る。例の「浮世床」「浮世風呂」のたぐひ、半分は直寫、半分は諷刺である。主として浮世の暗黑面に目がつくところを見ても謳歌連中でないことは分る。さりとて大の不滿不平で眞面目に革新を欲する心などがあるのならば中々以て滑稽八分の諷刺位ですまして居られたものでない。眞に世間一統があのやうな馬鹿者共で出來あがつて居ると信じた時分には、國家の前途がツイ心配になりさうなものだが、滿足して居ればこそ苦笑をして皮肉な洒落を吐いて一人天狗の鼻高々としよつちう脂下つて居るのと解してよからう。それ故諷刺家は滿足派のうちへ編み込んだはうが當然だと思ふ。此の意味から見てサアヴンテスもモリエールもフィールヂングもヂツケンスもサツカレーも滿足派に屬するものとするのである。併しながら如何に太平無事の德川時代或は歐羅巴の十八世紀の時代でも、中には見識の高い作者もあるから、まさかに當代の現實其の物に

は満足しない、現實の政治家には満足しない、現實の宗教家には満足しない、現實の藝術家や文學家には満足しない、現在の女、現在の男には満足しないが、さりとてそれがために直ちに絶望したり憤激したり、暗雲に破壞主義を主張する程に無分別ではない。是くの如きは畢竟人生の圓滿なりがたき自然の勢ひの然らしむる所で是非がない、幸ひにして今日行はるゝ宗教道德の理想は低くない、不健全でない、傾向を察すれば段々に善き方へ向ひ得べき見込がある、少くとも現代の最も勝れたる男女が其の腦裡に畫いて居る理想は流石に小でない、只人間の悲しさに兎角惡性癖に富んで居るから、ツイ〳〵墮落することがあるものゝ其の志すところは決して厭惡すべきものでない相力め相助けて彼等の志すところを遂げしむるが、我々の任務だ、過去の未開の世、數代の時代に比べて今日は兎も角も歎ぶべき時代だ、尠くとも其の理想の上に満足の意を寄すべき點があるといふやうな鹽梅に現實の有樣に對しては、幾多の不平もあり苦々しくも感じながら理想の實現し易からざるを感じて姑く當代に安住するといふたぐひがある。例へば馬琴位の作者であつて見ると、まさかに文化文政時分の現實には満足して居ない。馬琴は晩年は滝面を作つて居たらしい。滝面を作りながらも彼の蒲生君平等と交際して其の慷慨其の勤王論に同感を表して決して德川氏の政治に満足しては居ないが、而も尙革命を起さうなどいふ程の勇氣もないが不平もなかつた。蒲生君平や高山彦九郎等は單に口で慷慨してゐるばかりではない。多少其志を實行することに取り掛つて居た。馬琴はそれまでに熱してはゐない、併し嗚呼幕府は酷い事をして居る、國家の大權は皇室の有てあるのに、さりとては幕府の振舞の不埒さよと肚の裏では罵つて居たには相違ない證據は彼の俠客傳や八犬傳などを作つて隱然皇室の式微を慨してゐる點に見えてゐる。これは君平の感化でもあらうが、幾らかの不平氣は見える。其の勸善懲惡主義といふが畢竟は現世の實際を是なりとせぬからの結果である。されど又一面から見ると當代の理想を孔孟乃至佛陀の敎旨を自家の作中に寓して、それで世を感化訓誨し得られると信じてゐるらしいところに現代是認の氣味が見えてゐる。これらは現世を猶ほ此のまゝにて善いものと信じて居る證據、當代の理想に安立するもの、と稱してよろしい。之れに比ぶれば彼の芭蕉の如き人は一段と多感多情の人であるから彼の元祿時代の肉體の快樂一點張の大俗的の向上の心、精神上の欲求などは殆んど全く地に墜ちてしまつたやうな社會に介在しては眞に堪へられない思ひがあつたのでありませう。で大分厭世的である。併し芭蕉とても私のいふ意味での不滿と

いふほどに厭世的ではないらしい。彼れは自ら慰めて「寂しみ」といふ一種の理想界を大俗を極めた當代の現實界から拾ひ出して、人間界にはないが、自然界から拾ひ出して、安立した。當代の人間界は餘りに華美で過ぎ、賑か過ぎ、汕濃くて〳〵堪へられぬと感じたところから質樸な蕭疎な幽靜な淸淡な自然界の「寂しみ」へ逃げ込んだ、蓋し彼の西鶴が洒然脫然として、面白みを見出してゐた所は芭蕉が蛇蝎視し糞土視して嫌つた所で、彼は自然の世界に賑やかな都會生活とは直反對の「寂しみ」を拾ひ出して安住した。芭蕉は確かに煩悶苦惱して迷つて居る人ではない、兎も角もおのが理想を現世の風物中に見出して安住して居た人である。それと趣は大ぶちがふが馬琴將た安住地を現代の思想中に見出し、それに縋つて滿足して居た。即ち彼れが筆を取つて寫す所は現實ではない、彼れが理想とする現實界の最善最美なる部分を主として拾ひ出して寫してゐる氣味。彼の犬江親兵衛や、犬塚信乃や、犬山道節などいふ人物は決して德川時代に有觸れた人物ではない、さりとて全くあるまじき人物でもない。理想としは有り得た人物である。例へばエリザベス時代に於けるフィリップ、シドニーが彼のヂュトヘンの戰に自分が痛手を負うて將に死に垂んとして水を得て飲まんとするに際し、其れを自分が飲まずして手負の一兵卒に與へて死んだが如き、かゝる理想的行爲は殆ど千萬人中一人位であつたらうと思ふが、馬琴の筆に書かれた爲朝や義秀や八犬士などが恰もそれ、皆千萬人中の一人、但しあくまでもその時代に社會に瀰漫してゐた理想の權化で、決して絶無だとは斷言すべからざる人物である。さりとて稀有な例であるから寫實ではない。又彼の芭蕉が其の句に寫していだす所も、嚴密にいふと寫實ではない。客觀的に風俗や人情や風景を詠じたのも多いから見かたによつては寫實ともいへるが、芭蕉は主として自分の理想に適つた美しい方面、寂しい方面丈を寫して歩いたのとすると、これも理想派の方へ入れた方が當然であらう。然らば彼の紫式部のやうなのはどこへ這入るだらうか。されば これは先づ鼠色である、半分々々である。源氏物語の如きは或意味からいへば寫實だが或意味から云へば謳歌、直寫、醇化、此の三つを併せ得て居る。

さて保守派即ち滿足派の說明は此の位にとゞめて更に不滿足派即ち革新派の文學のことを申して見ませう。

これにもやはり二大別位はある。無理想にして不滿足不平なのもあれば、有理想なのもある。そも〳〵理想と云ふのは未だ現實にはせられない、具體的な希望を指すので、斯く〳〵したと云ふ希望が膝然と明確に形體を具足して居る場合を指して有

理想といふ。例へば此のコップの現實に滿足しないで、もすこし佳いコップが欲しいといふならば、それは斯樣々々と繪に描いて見せることが出來るやうでなければ理想があるのではない。さなきときは只是れが氣に入らぬと云ふのみのこと。眞にコップに對して不滿足であつて且つ何等かの理想があれば繪に書いて示し得られる筈。上がもう少し開いて、下がもつとつぼんで面してどういふ樣樣があつて、どの位水が容るといふことまで言へなければならぬ。然るに當代に對して文學者が不平不滿足を抱いてゐる場合に、何の明確なる理想もなくて、只不滿足だ、氣に入らぬ只何となく癪に障るといふやうな取留ないのも間々ある。そこは哲學者や政治家であると考へることが上手だから、何故に不滿足であるかといふことを自分で直ぐ反問する、我れは何故に不滿足なるか、何故に此の家は氣に入らぬか、何故に今日友人が言つたことが氣に入らぬかなどゝ一々反問する。學者肌は冷靜であるから斯ういふことも出來るが、詩人や文學者は多感多情で氣短で兎角逆の口上せ易いからどうしたらよいか、何故だか、其の邊はさつぱり夢中で、唯暗雲に氣に入らぬ「如何にして」とか「何故」とか云ふことに關しては根つから何の考もない手合が存外多い。勿論十九世紀以來の文學者は大ぶ頭が出來て居る、昔の詩人、藝術家などゝは大ぶ違つて居るが昔は理想も主義もなくして只漠然不平を懷いた者が多い。さういふ者は自然どういふ方針を執るかといふと現世を諷刺するか嘲罵するか直寫するかの何れかに傾く。直寫は言換へれば暴露です。諷刺は俗にいふ當てこすりである。蓋し自分は微力だから罵りたいことがあつても公々然とは言はない、いや言ひ得ない。昔から文學者といふ奴は先づ多く臆病だ、女性的だ。尤も時としては、くわつと逆上せて全く向う見ずになつて仕舞ふこともあるが、普通の場合には言動共に優しいのが特前、殊に專制時代、武斷時代には露骨には言ひ得ない。姑婆アさんなどが新嫁に向つて小言をいふ時にこれ〳〵そんなことをすべきものでないと正面から言つたらよさゝうなことを態々此頃はさういふのが流行るかねなどゝイヤに婉曲に云ふことがあるが、昔の文學者には往々にしてさういふ氣味があつたものだ。それが諷刺家。ところが少し氣の早い奴になると堪へ兼ねて嘲罵する。例へばバイロンのやうに、或は平賀源内のやうにむき出しに惡口を云ふ。或は又方法を變へて直寫する。これは諷刺でも嘲罵でもなく有の儘をさらけ出すので場合によつては前の二者よりも激烈な現代の呪詛となることがある。兎角專制時代は臭い物に蓋主義で、汚いものや醜いものは見せぬやう聞かせぬやうにしてある、こんなものをさらけ出すと治

安の害だ、風俗の害だといつて蔽つて置く。それを初手は遠廻しに諷刺したり口を極めて嘲罵したりしてゐるが、生中罵ると却つて辯護者も生ずる譯ゆゑ、何もかも只有の儘にさらけ出して批判は見るものに任せるといふ、言はぬは言ふにいや優るの手段を取る場合もある。私は無私公平でござる、是は嘲ける爲めに書くのではない、有の儘でござる。御覽なさい、今日の狀態はかくの通りでござると態と冷然として見せる。生中に諷刺したり嘲罵したりすると思慮ある讀者は手加減して讀む。これは何か私怨私憤があつて書くのだと疑ふこともあるが、如何にも解剖學者が解剖でもするやうに、現に斯う云ふ所に、實際斯ういふ物がありませう、何と實際ありませうがなと言はぬばかりに見せつけられるとツイ引込まれる。其の癖矢張眞の直寫は出來るものでないが、筆に魅せられてさう感ずる。殊に世故人情に通じない若い手合は實際を知らないから寫實だと思ふ。此の寫實といふ奴が俗間に向つては大ぶ勢力があるのである。ゾラの作などが此の種の寫實の一例である。言ふまでもなく寫實家中に現世に滿足して居るものも多くあるが間々上に言つたやうな不平家もある。今の世間は穢い臭い塵物のジク〳〵に爛れた上へ大きな絆のよい膏藥を貼つてゴマカして居るのである、それを引つ剝いで見ればコレ此の通りであるぞといふので、其の內心には世を淺ましく思つて改良しやうと思つてゐることが見える。思へらく、もはや臭いものに蓋主義ではいかぬ時代である。いつそ有りの儘に見せたはうがよい。昔は文學者が薄い衣を世間に着せて寫したが、それは却つて人を誤る基だ眞裸にして見せたはうがよい。もう世間は子供ではない、いくら蓋をしたとても夙に色々の事を調べて大要だけは知り拔いて居る然り只あらましだけを知つて居る。それが危險だ。知らせるならば悉しく知らせたがよい。生兵法と半知識は大間違の元だ。もう〳〵馬琴流の薄衣などで誰れが欺されるものかといふ立脚地。これを不平派の寫實家とする。滿足派のに比するに慥かに深刻と穿細と博大とに於て勝つてゐると思ふ。併し根が不平不滿から起つた寫實三昧であるから寫實といふは徒の名義で、其の實は主として醜所、穢所、惡所、劣所等をほじくり出して寫すといふ氣味がある。よしや寫實にもせよ暗、黑、面のみの寫實といふやうな弊が生ずる。今の所謂寫實小說を讀む者は每に此の點に注意を用ひねばならん譯です。さらぬだに文學者は事物を感情的に看取するから、白髮三千丈的の誇張に流れ易い。風色位の世相も筆拍子で文目も分ぬ眞の闇となることがあるのを思はねばならん。

以上は不平派中の無理想連中を略説したのだが、有理想の不平家は如何なるものであるかといふに、これは不平であると同時に、如何にして此の氣に入らぬ、不完全な社會を矯正すべきかといふ何等かの主義か方法かを持つて居るのをいふ。現社會の甚しき腐敗を怒り罵ると同時に斯く〳〵してといふ革新案乃至改善策を兎に角考へてゐるのをいふ。社會主義なり世界主義なり何等の一種の主義か理想かを懷抱してゐて或は公々然或は暗々裡に之れを其の作中に標榜してゐるのをいふ。或はシエレーのやうに不完全ながらも社會改良案を具してゐるのもあれば、イプセンやトルストイのやうな一種の倫理觀を主張するのもある。トルストイの如きは餘り大まかで極端に流れた說であるとは明かであるが、それも露西亞の國情を考へると無理ならぬと〻思はれる。あのやうに國家主義の極端に走り個々人々が利己一點張に流れた滔々たる大腐敗の積弊を救治せんとするに當つては、思ひ切つて悲壮と全然同樣の態度を取つて「汝の敵を愛せよ」「惡に抗する勿れ」など〻絶對非戰論を主張するの擧に出でざるを得ざるのでもあらう。古今東西を問はず言論の自由が無い場合には國民の大憤懣は每に文學の上に破裂する。維新前後の文學などにも其の證例はあるが露西亞の近世文學などは悉く其れ。ドストイエフスキーの作だとか

ゴルキーの作だとか何れも、有理想の不平文學と見做してよからうやうに思ふ。佛蘭西革命前の文學なども同類に屬する。彼の十八世紀の末に個人といふものは全く何の權利もなく、何事も國家とか、輿論とか、習慣とか、先例とか、何事につけても人爲の格式を重んじ、多數の力で個人を抑へ付けてしまふ惡弊が其の極に達し、且また何事につけても道理々々と唯智惠のみを重んじて、眞先の小理窟で萬般の是非を決し、一概に感情や本能を卑しみ度外視した時分には、例のルーソーの如き情熱家が飛び出して感情主義、自然主義の革新論を呼號したのも自然の勢ひ。或は獨逸の國家社會主義前の個人主義や感情主義の反動で、次第に怖ろしい勢力を得て來て、それが爲めに又々個人が蹂躙さるゝことゝなると、やがて彼のニイチエのやうな男が出て來て極端の個人主義を唱へる。是れ等は皆反動の然らしむる所といつてよい。或は又見事豫言者的に將來を見越した積りで、當るか當らぬかは別問題だが、百年二百年先を見越した積で小說を作つたり詩を作つたりする者もある。それやこれやを總稱して、兎も角も理想のある不平派、革新派の文學者とする。日本には不平派の有理想なのが餘り見つからない。是れからはあるかも知れぬが一寸思ひつかん。見やうによつては山陽などに一寸其の臭ひがあるかとも思はれる。純文學には適例を

見出しかねる。思ふに源平から北條氏へかけた暗黒時代には、無論大不平があつたであらう。非常な苦痛や憤怨があつたであらうが、それにも拘らず文學上には何等の手強い憤懣の爆裂もなかつた。西行なり、長明なり、いづれも厭世的ではあるが文學に現れた所は弱々しいもので、確とした積極的な理想があつたとも見えぬ。むしろ前に論じた芭蕉に似てゐる。社會を革新しやうとか、破壞しようとかといふやうな厭世家ではない、むしろ山へ引込んで仕舞はうといふ消極的の厭世家である。それから德川時代も大ぶ專制的で、不平や不滿は夥しかつたであらうが、尙ほ文學には有理想といふ程の不平は見えてゐない。一番手きびしい平賀源內からが、只嘲罵するばかり。一番見識のあつた馬琴すらも大抵は滿足してゐる證據が見えてゐる。要するに是れは國民精神の然らしむる所でもあらうが、一つは社會情態が流石にまだ極端の甚しきに至らなかつたからでもありませう。

以上は文學の內質を最も大ざつぱに分類してお話し申して見たのだが、其の所謂內質が佛蘭西大革命以來驚くべき思想界の大變動が起つた結果、前に例しなき變遷を經驗し、ふと上部を見たばかりでは何の變つたこともないやうだが、幅や長や度や色合や臭ひや深みやなどに於て怖しく違つて來たと言ふことを合點しておいて貰はねばならぬ。くはしくいへば作者の心の据ゑかた、目のつけどころ、材料のとりかた、筋の立てかた、作中に現るゝ人物の選びかた、其の他いろ〳〵の點に於て、最近七八十年間の作は詩でも劇でも小說でも其の以前の作とは著しく違つて來たといふことをお話申して置きたいと思ふ。これは無論文學のあらゆる方面に行渡つてゐることだが、今は其の最も重なる代表者として、主として小說の上を述べます。其の積りで聽いていたゞきませう。

內質が變遷したといふと、或は早合點して、それでは前に申した分類其の物が變つて來たのかと思ふ人もあるかも知れんがさういふ意味ではない。昔も今も滿足、不滿足又は保守革新と稱すべき二大傾向あることは異なることないが、其の傾向を代表する詩人、文學者といふ者の身分人格が變つて來たと同時に其の人員も殖えて來たといふこと、即ち大昔は何處の國でも詩人文學者の數は指を折つて算へられる位に限られてあつたのが、それが近世に近くに隨つて段々に殖ゑて來て十九世紀の今日に於ては殆ど無數となつたといふことが先づ第一の變遷です。次には滿足派にもせよ、不平派にもせよ、寫實派にもせよ、理想派にもせよ、作意が著しく深刻になり、其の描寫法は精緻になつたといふことです。これが漸々に醸成せられたのなら驚くに

も常らんが、比較的に激變だから注意を要するのである。歐羅巴でも十七八世紀以前イヤ十九世紀以前の文學と十九世紀の文學との間には實に驚くべき懸隔があるといつてよい。十五六世紀頃と紀元前四五百年前頃との懸隔よりも甚しい位の懸隔が此の五六十年間にあると申してもよい位である。其の內容の度や質が著しく違つて來て複雜に濃厚に精細になつて來たのみならず幅も擴り長さも延びた。是れ主として何に原因するかといふと、要するに社會大進歩の結果として文明の利澤が全國を波及し教育が廣く普く行はれるやうになつたために、國內の人々が皆各々自意識を鋭く有するやうになつた其の反影たるに外ならん。大昔の人間とても無論神經があるからには己れといふことを意識して居たには相違ないが、又自然や人生に關して多少の觀念、多少の解釋を有て居たてもあらうが、何をいふにも教育は屆かず萬事天然自然に打任して世を送る習ひ、其頃の人間はどうしても今の野蠻の片田舍の人などの如く質樸で粘液だちて遲鈍だ、隨つて考も自ら單純で悠長で、先づは衣食住さへ得ればそれで安んじてしまふ傾向が多かつたものだ。而して衣食住を得ることが、大體に於て今のやうに競爭が烈しくはないから、いくらか容易く、隨つて安住すべき緣が多い。だからボンヤリした人間が多かつたものだ。今の文學者肌のやうな神經の過敏な手合は其の頃あつたらばそれは稀有の例、例外中の例外、或は狂人を以て目され、又は神人を以て過せられたであらう。前に擧げた諏訪の湖水の譬喩でいへば文學者に比すべき氷の薄い箇所は大昔はタカが萬人に一人、百年に一度、十里四方に一箇所位しかなかつたものであらうが、十九世紀以來は自意識熱が熾んになつて季候が激變したせいで、世界大の湖のあちらこちらが皆總體に薄くなつたといふ有樣即ち人々の自意識が滅法鋭くなつて、國を擧げて神經過敏病に罹つたといふ氣味がある。大昔は決してさうではなかつた、或一人か二人かが一種めづらしい、遺傳性の然らしむる所で神經過敏になつて居るといふ風であつた。外の手合とても感じがなかつたのではない、いや早晩同じ感じを經驗するのではあつたが、それは遙かに後のことであるか、然らざれば感じ方が薄弱であつた。ホーマアやヘシオッドや人丸や赤人などはザラにあつたのではない、千万萬中の一人か二人かであつたのです。いや西行や長明すらも鎌倉時代の幾萬人中の一二人であつたのです。さて此のやうな超群の聰明者むしろ神經過敏家が恰も南枝の先づ發くが如く、薄氷の先づ融くるが如く當時の國民の感情思想を代表して眞先驅けて歌ふと、外の凡俗がそれを聞いて驚く。最初は何をいふのかと解らぬでゐる、やがてそろ〳〵心づく。

やゝ神經の發達した手合が先づ呟く。此のごろうちおいらたちがちょうどあのやうなことを思ひかけて居たが、どうもまだ判然としてはゐなかつたが正にあれだ、いかにもあの人が歌つた通りだ、あゝ云はれて見れば眞にさうだ、全く同感だ、贊成々々と斯ういふ鹽梅に歡迎する。即ち一人づゝ拔けたものが出て來て音頭をとると全村、全國の民が聲を合せるといふ鹽梅。今でも片田舍などに行くと之れに類することがありませう。村の口利きが膝を進めて、おらが料簡ぢやあ斯う〳〵だが皆さあはどう思はつしやるだかと口を開くと皆が異口同音に、ハア魂消た、おらの思ふことも正に判然とそれだアよと一も二もなく贊成することがある。自意識の行渡らぬ頃には多數は何事につけても雷同者であつた。常にさういふ氣味があつた。なぜかといふと其のずばぬけた一人が全團體の意識を代表して巧くこれを云ひあらはして呉れる以上は、更にこれを云ふ必要もなく、またこれと競爭し得るやうなエラモノはさう容易に出なかつたのです。何處の古代を見るも最初の文學は抒情詩即ち述懷體の歌、而してそれは常に當代の興情や輿論をほのめかすに外ならぬもので、詩經にしろ、萬葉集にしろ、いづれも其の頃の國民の意思や感情を代表したものである。必ずしも拙者は諸君の代表として歌を作るのでござりまするぞと斷つておいて作つたものではないが、其の作者が一代の稀者であつて、代表的の才智や思想や感情を具へてゐればこそ、皆の者がおのづから同感する。是れは管に文學の上ばかりではない、政治上、宗教上にも其の通りなことがあつたであらう。東西ともに大昔は一地方にずば拔けて力量又は智惠秀でた者が出た時分には他の多數の者はたとひ幾らかの力量があつても神經が怖しく鈍いとか、智惠は少々あつても勇力遙かに〳〵劣てゐるとかで其の一人に呑まれてしまひ、怖れ服し、唯々諾々其の命の儘を奉じて右し左すといふがきまり。宗教の方を見ても亦同樣であると思ふ。大昔はエラモノは只一人。であればこそ宗門も成立つた。競爭して拮抗して邪魔をするものがなかつたので。基督や釋迦などが出た時分はもう大ぶ降つてからの事ゆゑ、八方に大ぶ大勢の豪傑が居て競爭して邪魔をしたやうではあるが、それでも尙ほ今日の世界に較べたらズット少なからう。といふとどこに今日釋迦や基督と競爭する豪傑が澤山に居るかと反問する人があるであらうが、そんなのが眞に居るといふ意ではないが、腹の中で、自意識の上だけで自分だけは唯我獨尊の豪傑が澤山ゐる、即ち天狗樣の鼻競で、實際は其の人に比べて甚しく劣つてゐても當人だけは全く同等又はそれ以上の豪傑の積りでゐるから厄介だ。宗教家でも政治家でも文學界でも此の意味

の豪傑が殆ど無數。これ畢竟教育弘通の結果。よしや優劣があるにしても其の違ひかたがマサカに大昔のやうではない。奈良の大佛と其の傍に居る小佛の如くには違はない。鎌倉の大佛と奈良の大佛との懸隔位までに大豪傑に接近した小豪傑が殖ゑて來た。これが何事につけても今日と大昔と違ふところ。一人の力を以てして全國を支配するなどいふことは今日は最早や殆ど望みがない。基督や釋迦ならば知らず親鸞や日蓮やルーテルやサボナローラほどの豪傑でも廿世紀の今日に出ては或はあれだけの仕事が出來にくいかも知れぬ。政治上とても同じやうな氣味。自意識が全國に瀰漫してゐるだけに、めい〳〵に料簡があり、主義があつて意地が張つてゐて兎角素直でない、昔のやうに一人の音頭に聲を合せて、雷同して謳ふといふことが少ない。おまへはおまへ、おれはおれだ、汝西へ行け我れは東へといふ離れ〳〵。自意識(自覺)は結構、意志の獨立は立派、個人主義は必要だが、かう斯う甚しくなつて來て見ると又少々困りものでもあるのさ。大昔はさうではない。所謂グーピング、グラウド(呆然たる大衆)は只アンケラカンと口を開いて唯命是れ待つてゐるので、一人の大將分が右せいといへば皆一齊に右へ向いたもの。昔は何事も實利が大切、職をするとか農業をするとか商業するとかゞ最も大切な事であつた、その最も大切な事であつた、その最も大切なことをさへ音頭取のいひなり放題、況んや歌だの文章だのは閑事業ゆゑ頭から重きを置いてゐない。歌や音樂は單に消閑の道具たるに過ぎなかつたものだ。隨つて文學藝術は昔は戰に出て傷を負うて跛になつたものとか、生れつき病身なものとか何れも多少片輪者で癈人で概して柔弱非力な女に似て非なるものが據なく文學藝術をやるといふ風に昔は出來て居たものです。十七八世紀になつても文學は尙まだ玩具視せられて居た趣があつた。而も中流以上の玩具であつた。所が十九世紀になつてはズット變つて來た。歐羅巴では十八世紀の末、日本では明治維新以來、西洋はルーソー時代からダラ〳〵と樣子が變り、日本は此の二十五六年以來から一時にドット變つて來た。文學の品位が高められたと同時に其の作者も驚くべく殖ゑた。今ては中學校の書生でも或程度までは詩人であつて七五調の新體詩位はお茶の子だ。少くとも自分だけは人丸、赤人何かあらんやといふ大抱負。それは其の筈である、教育普及の結果我れは我れなりといふ自意識が社會一面に盛んになつて來て都のみならず讀書癖や著作熱が寒村僻地までも及ぶやうになつて見れば誰れの心にも多少鬱勃たる思想感情がある、それに言論は比較的自由の世の中、勢ひ之れを表白したいと思ふやうになる譯。所へ持つて來

て今は表白するにも便宜が多い。昔は小説をチョット書いて見たいと思つても手心が分らず、手引が無かつたものだ。現に私が始めて小説を書いた時分は生意氣にも馬琴の作意が氣に入らないので、一番之れに反對して書いて見やうと思ひ立つたのであつたが、さて何分にも手心が漠として定まらん。師表が欲しいと思つたが其頃兎も角も世上に名を知られてゐた小説家といつては先づ假名垣魯文位のもの。無論此の男とても大した人ではなかつたので、弟子入はせなんだがマアそんな有樣。然るに今日は小説の名家なり手本なりが雲霞の如くある、文章だけでいへば何れも魯文以上といつてよい。即ち文學者となるに都合のよい方便が十分に手近に而も手輕に備つてゐるから溜らない。で皆が文學者になる。銘々が思ひ思ひの經驗や閲歴を材料として思ひ思ひの筆に其の直覺したところの浮世の味ひを語る。ところが仕入が手早いだけに大昔の作意には往々にして違ふところがある。必しも劣るといふではない或は深刻とか寫實とかいふ點に於ては大昔のに遙かに勝る。只幅が狹い。自分一個の經驗談、只一人の趣味談といふ氣味がある。例へば我れは此の一年間に人生を斯う味うた、我れは此の半季間に自然を斯う味うたと銘々思ひ〳〵の一時の好き嫌ひを語るに過ぎない。諸々方々の名高い割烹店を味ひ比べた上、西

京、大阪、名古屋、東京と味ひ比べた上、下戸にも上戸にも同感した上、即ちありとある辛酸辛苦を嘗め盡した上に料理通を云ふのならば先づ確かともいつてよいが、さうでなく、ほんの場末料理を一二度味つて見たばかりで、いや甚しいのは貯料理、下宿屋料理などを標準としての料理談をするのもある。かういふ飲食通をいふのはあぶないものさね。そこに至ると昔の作は念の入つたもの、尠くとも一人の經驗でなく、一代の經驗で、嘗へていへば十八大通とか何とかいふたぐひの食道樂家の料理談に似てゐる。江戸前とか深川料理とか妙に偏つてゐることのある代りに其の一ヶ處だけには遍通してゐる趣味性の代表、單に一人一個の好き嫌ひを語るのではない。此頃はさうではない。地方から東京へ來る、東京から地方へ行く、觸れる、感ずる、すぐ表白するといふやうに兎もすれば徒の一時間、一日、一ヶ月の閲歴や長くて一年、數年間の閲歴を百ページ、二百ページに綴るといふ風、即ち其の人一人の經驗直覺是れは大昔には曾てない圖。無論多少の例外はあるが、おしなべていへば昔の作は十八世紀頃までも興情、興趣味を代表したものだ。少くとも其の土地其の時代の三分一又は半分位を代表したものだ。一例を擧ぐれば英吉利の十四世紀頃にチョーサーといふ有名な詩人があつた、それと同時代にラングランドといふ坊さんの詩人があつた。

チョーサーは主として其の時代の光明面を寫し、ラングランドは專ら暗黑面を寫してゐる。客觀詩人といはれるチョーサーとても萬遍なくはゆかぬ、半分だけを寫す。マア其位に分れることはあるが、今日の作のやうに殆ど千差萬別、作者の面の如く着眼が變るといふやうなことは曾てなかつたといつてよい。又昔は縱し小說の筆を取つても先づ自分の實際經驗したことなどは隱して、よしそれを書くにしても餘所事らしくもてなし、歷史上の事蹟に附會したりなどして綴つたものだ。言論の自由がなかつたせいでもあるが、自分が切に感じてゐる思想を述べるにも有の儘には書かず、何か外の事を藉りて來てそれに托して述べたもの、眞の經驗を露骨に寫すことは愧ぢ又は憚つた氣味がある。然るに十九世紀の初めからはさうでない。例のルソーが自家の一代の閱歷をソックリ有の儘に書くことの端を開いてより、それが次第に風をなし今は普通の人の愧ぢ憚ることまでも絕妙巧辭に美化して微を極め精を盡して其の儘に書き綴る。是れが又珍らしいから世間が歡迎する。さて〳〵是れは今日まで聞いたことのない殘念な話だ、イヤ讀むに堪へぬ、猥褻な話だ、剩へ自分の閱歷らしく書いてあるが、さて〳〵酷い事をする奴もあるものだ。讀むに堪へんと云ひながら幾たびも〳〵讀む手合もある。て書くものが天才であると破廉恥

然たる失策談や懺悔談の中に今までは全く蓋をされて世に知られなかつた社會の醜所、弊害、弱點、惡德、其他いふにいはれぬ隱微の事實や趣味が躍然と寫し出されてあることがある。例へば戀愛のことを談じても昔の作は大概理想的に奇麗に奇麗にと拵へて書いてゐたものであるが、焉ぞ知らん斯かる淸淨げなる戀愛の裏面にも隨分肉慾的な穢らはしい部分もあらうし、暗黑面もあらう。無論戀愛は神聖なのばかりではない不神聖なのもあるべき筈。又解釋によつては肉體的必ずしも惡でなく精神的と稱するのが間々却つて罪惡の源となることもあらう。常套を脫して新しい方面に筆を着けるなれば戀愛に關する經驗談は千差萬別となる譯。且や文學は常に材料と主題の新しき珍らしきを求めて止まざる習ひなれば從來が奇麗一點張であれば今度は穢な盡しとなりゆくは自然の趨勢、日本では近松以來淨瑠璃、俗曲、草双紙等に寫された戀愛はお染久松でもお七吉三でも寧ろ肉體的に傾いてゐる方だが、西洋のは中古以來宗敎的干涉もあつて戀は常にスピリチュアルに寫されてゐる氣味、センシュアル、ラヴは先づ〳〵蓋がしてあつたといふ體。それが十九世紀になつてスッカリ暴露された。桃を食べさせる時分に虫のある所はすつかり取つて仕舞つて食べさせておくと桃といふものは少しも虫が居ないと思ひ込んで居るから、

いざ獨立して自分で勝手に取つて食べやうとするに當つて大案外を感ずる、ツマリあまり蓋をし過ぎた反動で是非がない。前々代のが醇化を主とし理想的に偏して人生や社會の善美なる方面ばかりを寫さんとした其の反動で、今度は又醜惡の方面ばかりを寫すやうになつたのである。昔の文學は概して當社會全體の思想や感情を代表して寫し出した、言ひ換へれば當社會の大多數が理想として仰望してゐる、皆が崇め拜んでゐるやうな人物、譬喩でいへば山の絶頂にも比すべき人物ばかりを取り出して寫してゐた氣味。彼のホーマーのイリヤッドの中に現れる英雄豪傑、三國誌や水滸傳に出て來る人物、馬琴の八犬傳の主人公などは無論寫實的人間ではない、孰れも其の時代〳〵の理想の絶頂を代表してゐるのである。然るに十九世紀以後今日の文學は決して社會の絶頂を代表してはゐない、峯ではない、麓だ。いや平野だ。て谷もあれば畑もある。陸もあれば海もあり沼もある。掃溜もあれば泥溝もある。茶室もあれば犬小屋もある。今の文學の内容は斯ういふ風になつてゐることを忘れてはならぬ。勿論犬小屋の實相も觀察に値する、或は掃溜にどんなことで鶴が下りてゐまいものでもない、ダイヤモンドの指環が埋れてゐまいものでもない、しかも或一冊或篇に寫された世相人情が人間の事相だとそれ一つに拘泥したら大間違ひの悲。要するに近時の作は非常に主觀的である。形式は敘事的であらうとも劇的であらうとも殆ど皆其の作者一個の抒情詩たるの氣味、幸にその作者がゲーテ程の大人物である時分には尠くとも前後四五十年間の思潮を代表することもあらうが先づ大方はさうは行かぬ。イブセン、トルストイなどいふ大頭とても其の實は紛々然たる現思想界の大綱一條宛を代表するものに過ぎない。約言すれば文學が團體的から轉じて個人的になつたこと、興論的、順俗的、常套的から主觀的、特質的、自傳的、懺悔錄的、英雄的、理想的から日常的、現實的、平凡的になつたことが十九世紀以來の文學の特質である。隨つて昔は當代の文學によつて當代の社會全體の代表となすを得たものだが今はそれは出來ぬ。只其の一角又は只その幾人、甚しきは只一人を示すに足るのみといふことを記憶して讀まねばならぬ。此の心得なくして十九世紀廿世紀の文學を讀むものは自ら欺き他を欺くに到ること無きを保しがたい。

以上あまり大まかで十分會得なさるまいとは思へど此の範圍内では之れより以上を語りやうもない。くはしくは更に他書についてお學びなさるがよい。右古代文學と今代のとの相違を論じた分だけは亜米利加の批評家 Mabie といふ人の Essay on Literary Interpretation といふ書に見えてゐる大旨に據つたのであるから委しくは該

書を御覽なさい。（尤も引例や説明の仕方は全く違つてゐます）。

文學入門 終

62
1103

３１０５４２－０００－０

６２－４０３

文学入門

坪内 雄蔵　講述

早稲田大學三十九年度

法學會科第一學年講義筆

文學一門

平井雄藏

42
443